

Dreams

片倉政実

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突然、謎の空間へと連れ込まれた六人の男女。その男女の元に現れた謎の人物——ドリーマーから告げられたのは、その空間がドリーマーが作り出した夢の世界であり、この夢の世界で行われる命を賭けたゲームに参加させられるために連れて来られたという事実、そしてクリアした者には好きな願いを一つだけ叶える権利を与えられるという物だった。そのドリーマーの言葉で協力し合いながらゲームをクリアしようとする者、他者を蹴落としてでも自身のクリアを優先しようとする者など様々な思惑が交錯する中、ゲーム内に散りばめられた謎や敵達が立ち塞がる。

今、様々な人間模様が入り交じる命を賭けたゲームが幕を開ける。

目次

番外回	キャラクター設定	1
番外回	用語集	11
序章	プロローグ	
第1話	ゲームの始まり	14
第1章	深淵高校	
第2話	合流	27
第3話	探索開始と新たな手掛かり	37
第4話	エネミーからの逃走	57
第5話	再会と再開	75
第6話	恐怖の涙と蘇る記憶	86

第7話 答え合わせと明らかになる事
実

番外回 キャラクター設定

【主人公】

名前：甲斐暖士かいだんじ

年齢：17

性別：男

職業：学生

ゲームクリア時の願い：？

趣味：筋トレ、読書、音楽鑑賞、料理など

特技：謎解き、瞬間記憶、剣道

好きな物：甘い食べ物、家族や友人、運動、晴れの日など

嫌いな物：身勝手な存在や理不尽な事、からす烏など

今作品の主人公。謎の人物——ドリーマーによって仕掛けられたゲームの参加者であり、ゲームクリア時の報酬である願いを叶えられる権利にはあまり興味が無く、ドリーマーが管理する夢の世界——『エンドレスドリーム』から生きて帰る事を目標にし

ている。

自身と同じ目標を持っている参加者である神月鈴歌とアルヴィン・タイには、初めて会ったとは思えないような懐かしさを感じており、ゲーム中でもクリア条件を満たす事を優先しながらも、その謎を解くために様々な場所を探索している。

鈴歌達脱出をメインとしたチーム内では、リーダーとして頼られており、高い発想力や推理力を有していることから、探索と謎解きの両方を担当している。

基本的には、分け隔て無く接する明るい性格で、黒のストレートヘアに多少鋭い目付きの二枚目顔という事もあってか、日常生活では男女関係なく好かれており、友人なども多い。

【ゲーム参加者】

名前：神月鈴歌しんづきれいか

年齢：17

性別：女

職業：学生

ゲームクリア時の願い：？

趣味：食べ歩き、料理、天体観測など

特技：バク転、ピアノの演奏

好きな物：運動全般、美味しい物、晴れの日など

嫌いな物：自分勝手なもの、一人になる事、雨の日など

謎の人物であるドリーマーによって『エンドレスドリム』に招かれた参加者の一人。暖士同様、ゲームクリア時の報酬である願いを一つ叶える事が出来る権利には興味が無く、生きて帰る事を目標としている暖士とアルヴィンと協力しながらゲームに臨んでいく。そして、暖士とアルヴィンに妙な懐かしさを感じており、ゲームのクリア条件を満たす事を優先しながらも、その謎を解くために様々な場所を探索している。

謎解きはあまり得意では無いが、運動神経や反射神経などは良いため、暖士達の中では主に探索面を担当している。

容姿は黒のポニーテールに少し気の強そうな顔付きで、美少女であるため男子人気は高いが、自身はあまりそういう事には興味が無く、どちらかと言えば女子の友達の方が多い。

名前：アルヴェイン・タイ

年齢：27

性別：男

職業：サラリーマン

ゲームクリア時の願い：？

趣味：読書、ボードゲーム、料理など

特技：謎解き、手品、ギターの演奏

好きな物：ゲーム、友人などとの会話、甘い食べ物など

嫌いな物：曇り空、辛い食べ物など

謎の人物であるドリーマーによって『エンドレスドリーム』に招かれた参加者の一人。暖士同様、ゲームクリア時の報酬である願いを一つ叶える事が出来る権利には興味が無く、生きて帰る事を目標としている暖士と鈴歌と協力しながらゲームに臨んでいる。そして、暖士と鈴歌に妙な懐かしさを感じており、ゲームのクリア条件を満たす事を優先しながらも、その謎を解くために様々な場所を探索している。

運動はあまり得意では無いが、知識や発想力などには優れているため、チームの中では主に謎解き面を担当している。

優しそうな雰囲気を漂わせた短い金髪の二枚目顔で、本人曰く日本に住んで長いため、母国語の他にも日本語も話す事が出来る事から、仕事面だけでなくプライベート面でも友人は多い。

名前：丑三時宗うしみつときむね

年齢：55

性別：男

職業：ホテルの総支配人

ゲームクリア時の願い：？

趣味：ゴルフ、ギャンブル、ガーデンング

特技：無し

好きな物：酒全般、貴金属類、自身が経営するホテル、植物など

嫌いな物：自分に従わないもの、暗闇など

謎の人物であるドリーマーによって『エンドレスドリーム』に招かれた参加者の一人。暖士達とは違い、ゲームクリア時の報酬である願いを一つ叶える権利に興味があるが、

自分を無理やり連れてきたドリーマーに対しては、激しい怒りを抱いているため、ゲームクリアした際にはドリーマーの正体を暴いた上で訴訟を起こそうと考えており、それを達成するためにゲームクリアを目指している。

非常に傲慢な性格をしており、自分の意に介さないものは、どんなものであろうと嫌う。そのため、友人は殆どいない上にホテルの従業員や家族からは快く思われていない。しかし、自宅の庭に植えている花々には、しっかりと愛情を注いでおり、どんなに疲れていようと花の世話だけは自分で行っている。

短い白髪に皺が寄った厳めしき漂う顔の壮年の男性だが、体格はガツチリとしており、体力にも多大な自信を持っている。

名前：王賀真央おうがまお

年齢：17

性別：女

職業：学生

ゲームクリア時の願い：？

趣味：ぬいぐるみ製作、料理、写真撮影

特技：声帯模写、裁縫

好きな物：シヨツピング、可愛い物、甘い食べ物、風景写真

嫌いな物：不気味なもの、苦い食べ物、鏡

謎の人物であるドリーマーによつて『エンドレスドリーム』に招かれた参加者の一人。暖士達とは違つて脱出時に与えられる願いを一つ叶えられる権利に興味があるため、それを脱出の目的としている。

スラツとした体型の茶色のセミロングヘアの少女で、普段から明るい性格な上、人懐っこさを感じさせる雰囲気を漂わせており、男女関係なく気軽にハグやハイタッチなどを行っている。

趣味の一つがぬいぐるみ製作なため、手先が器用な上に細かい作業や小さな物を見つめる事が得意。

名前：九鬼拓門くきたくと

年齢：24

性別：男

職業：銀行員

ゲームクリア時の願い：？

趣味：熱帯魚の飼育、ネットサーフィン、読書

特技：無し

好きな物：拓けた静かな場所、薄味の食べ物、動物（主に魚類）など

嫌いな物：閉所や狭い場所、濃い味の食べ物、子供など

謎の人物であるドリーマーによって『エンドレスドリーム』に招かれた参加者の一人。暖士達とは違って脱出時に与えられる願いを一つ叶えられる権利に興味があり、それを脱出の目的としている。

黒い七三分けの弱気そうな雰囲気を漂わせた男性で、普段からあまり強気に出る事は出来ないが、自分の中で一度決めた事はしっかりと守ろうとする意志の強さは持っているため、『エンドレスドリーム』内で行われるゲームでも探索には意欲的な態度を示している。

【敵】

名前：ドリーマー

年齢：？

性別：男

職業：？

趣味：？

特技：？

好きな物：？

嫌いな物：？

暖士達が参加するゲームの舞台であり、夢の世界である『エンドレスドリーム』の創造者兼管理人の謎の人物。体格や声質から性別が男という事しか分かっていない上、故暖士達を集めたのかについても『ある共通点』があるからとしか語らないため、現在はその殆どが謎に包まれている。

自身が管理人である『エンドレスドリーム』内では、ゲーム参加者達を阻む『エネミー』や謎を作り出したり、その中にいる相手の行動を自身の好きなように出来たりするため、その力を利用して命を賭けたゲームの運営を行っている。

目元だけを隠した白い仮面にシルクハットと燕尾服という姿で暖士達の目の前に現

れ、その後は放送などの形でしか暖士達にコンタクトを取っていないが、自身が仕掛けたゲームには誇りと自信を持っているため、ゲーム参加者が一方的に不利になる状況は作らないようにしている。しかし、暖士達脱出を目標とするチームには、多大な興味を持っていて、時折ヒントのような物を与えている。

番外回 用語集

『エンドレスドリーム』

ドリーマーによって創り出された夢の中の世界。夢の中の世界のため、誘い込まれた人物達の体自体は現実世界にあり、意識だけが移された状態になっている。この世界から脱出するには、ドリーマーが作り上げたゲームをクリアする必要がある、ゲームは四つのアトラクションの各クリア条件を満たす事でクリアする事が出来る。しかし、アトラクションをクリア出来ないまたはアトラクション内で何らかの理由で死亡した場合、誘い込まれた人物の命は実際に失われる。

『アトラクション』

ドリーマーが作り上げたゲームの舞台となる場所。アトラクションは、計4つ存在しており、そのクリア条件はアトラクションによって異なる。アトラクション内には、クリアをするために必要な道具やエネミー達を妨害するための障害物など様々な物があがるが、アトラクションの中には隠し通路や隠し部屋が存在する物もある上、ゲーム参加者に関係する物も隠されている。

『ドリームアイランド』

作中の現実世界に存在した遊園地で、ゲーム参加者が所有している携帯端末のブラウザからこの遊園地のサイトを閲覧する事が出来る。現在とはある理由から閉園してしまっており、サイト内では閉園をしてしまった理由なども見る事が出来る。

『エネミー』

各アトラクションにドリーマーが設置したゲーム参加者のクリアを阻むための敵。姿や名前は、そのアトラクションによって異なっており、それぞれ異なる力を使用する事が出来、ゲーム参加者達を見つけた際の反応もそれぞれで異なるが、ゲーム参加者達を殺すために設置されているため、参加者達を見つけた際には、全力で殺しにかかる。基本的に倒す事は出来ないため、アトラクション内ではエネミーに捕まらないように逃げる事になるが、障害物などで一時的に動きを封じる事などは可能なため、その場にある物や手持ちの道具などを駆使する事で、エネミーの脅威から身を守る事が出来る。

『深淵高校』

ドリーマーが作り上げたアトラクションの内の一つで、廃校がモチーフとなってい

る。アトラクション内には、各3階まである教室棟や特別教室棟の他、体育館やプール、屋上といったエリアが存在し、校内のどこかに隠された出口から脱出しなければいけないが、出口から脱出するには、同じく校内のどこかに隠された鍵を見つける必要がある。

『傲慢』
プライド

深淵高校に出現するエネミー。金色の仮面を被

り金色のスーツを着た男性の姿をしており、常に苦しそうな声を上げている。普段は、深淵高校内をヨロヨロとしながら徘徊しているが、ゲーム参加者を見つけた際には、その様子からは想像もつかないほどの速さで走り出す。

ドリーマーによって設定された能力は怪力と暗視の二つで、どんな暗闇の中でもゲーム参加者達を見つけ出し、捕まえた参加者をその怪力で絞め殺すなどする。

序章 プロローグ

第1話 ゲームの始まり

「……………ん？」

掌に薄らと感じるヒンヤリとした感触と共に目を開けると、視界に入ってきたのは薄暗い謎の空間と少し離れたところで倒れ込んでいる数人の男女の姿だった。

え……………ここは一体どこなんだ……………？ 自分の部屋で眠ってたはずなのに、気付いたらこんなよく分からないところで倒れてるし、何故か寝間着じゃなく学校の学ランを着てるし……………。

あまりに突然の事だったため、自分が今置かれている状況が理解できず、俺の頭は混乱していた。しかし、倒れ込んでいた人の内の一人から「うう……………」という声が上がった瞬間、頭の中の混乱がスッと無くなり、俺はその声が出た方へとすぐに駆けだした。すると、それが合図になったかのように次々と倒れていた人達が起き出し、俺が近くへと寄った頃には、全員が起きあがっており、その誰もが不思議そうに周囲を見回していた。

「……………は……………ど……………なんだ？」

「暗い……なのに、他の人の顔ははつきりと見える……?」

「一体……何がどうなって……?」

その人達はそれぞれ別の疑問を口にしていたが、それに答えられる人は誰一人いなかった。いや、たどえいたとしてもそれに答える事は無いだろう。何故なら、うっかり答えてしまおうものなら、ここにいる全員を敵に回す事になる上、こんなよく分からない空間に俺達を閉じ込めるような奴がそんなミスを犯すわけがないからだ。

さて……となると、何か動きがあるまで待つ方が良い事になるけど、こういう時つて大抵誰かが騒ぎ出すんだよな……。

周囲の様子に注意を向けながらそんな事を考えていたその時、一人の人物——スーツを着た壮年の男性が苛立ちの色が浮かんだ表情で周囲をキョロキョロと見回し始めた。

「くそつ、一体何なんだこは……! この私をこんな薄暗い場所に拉致するなぞまったくもつてふざけている……!」

「あ、あの……こんな状況でイライラしてもしようがないですし、一度落ち着いた方が——」

「黙れ!」

「ひっ!?!」

壮年の男性の怒声で老人に話し掛けた人物——スーツを着た若い男性が悲鳴を上げ

ると、壮年の男性はイライラとした様子で怒りを孕んだ大声を上げ始めた。

「私を誰だと思ってる!? ホテル・グリッドの総支配人、うしみつときむね丑三時宗だぞ!」

「ホテル・グリッドって……確か大富豪や芸能人ぐらいいしか泊まれないって言われてる超高級ホテルだったような……」

「その通りだ! そんなホテルの総支配人たるこの私に意見をしようなぞ誠にけしからん! 身の程を知れ、この若造が!」

「は、はい……!! 誠に申し訳ありませんでしたあーっ……!!」

壮年の男性——丑三さんに対してスーツ姿の男性が情けない声で謝りながら頭を下げると、丑三さんは忌々しげな視線を向けながらふんと鼻を鳴らし、今度は俺達全員に對して大声で呼び掛けてきた。

「そこにいるお前達もだ。この私には決して逆らわず意見などもしようとは思うなよ!

私はお前達のような平民とは違う存在なのだから! 良いな!」

『……………』

俺達の誰もが返事をせずに黙っていると、丑三さんはわざとらしく舌打ちをした後、俺達から視線を外した。

ふう………こういうのがあるとは思ってたけど、まさかここまで自分勝手な奴だとはな……。ここがどこでこれからどうなるのかは分からないけど、あの人とだけは協力し合

えなそうだな。

丑三さんの言動からそう判断した後、俺は他の人にも話を聞こうと思ひ、誰から話し掛けたものか悩んでいた時、「ねえ」という声が聞こえ、俺はそちらに視線を向けた。すると、そこにいたのは俺と同じ年くらいのセーラー服姿の黒いポニーテールの女子であり、少し気の強そうな表情で俺の事をジッと見ていた。

「えつと……何かな？」

「あの丑三つて人、どう思う？」

「どうつて……あまり協力的には見えないし、態度も大きいから俺的には嫌いだな」

「そう……うん、やっぱり話し掛けて正解だったみたいだね」

その子が安心した様子で微笑む中、俺はその子の口から出てきた言葉が気になっていた。

「正解だった、つていうのは？」

「この中ではまともで信用が出来るつて事。こんな奇妙な状況に巻き込まれたからには、信用出来る仲間を増やしておく方が良いでしょう？」

「まあな。つまり、俺は君のお眼鏡に適ったという事か」

「まあ、そうなるかな。あ……自己紹介がまだだったね、私は神月鈴歌《しんづきれいか》、高校二年生だよ」

「神月鈴歌、だな。俺は甲斐暖士かいだんじ、同じく高校二年生だ。よろしくな」
「うん、よろしく」

神月と自己紹介をし合いながら握手を交わしていた時、「その自己紹介、私も混ぜてもらえるかな？」という声が聞こえ、俺達が同時に視線を向けると、そこには優しそうな雰囲気漂わせたおよそ20代後半に見える短い金髪の外国人の男性が立っていた。

「あ、はい。もちろんですけど……日本語、スゴくお上手ですね?」

「ははっ、まあね。見ての通り外国人だけど、日本に住んでもう長いから」

「そうなんですね。あ、俺は甲斐暖士って言います」

「そして、私は神月鈴歌と言います」

「甲斐暖士君に神月鈴歌さんだね。私はアルヴィン・タイ、アミューズメント系の企業に勤めている極々普通のサラリーマンだ。呼ぶ時は遠慮無くアルヴィンの方で呼んでくれ」

「分かりました」

「うん、ありがとう。後……もし君達さえ良ければ、君達の事を名前の方で呼んでも良いかな?」

「それくらい別に構いませんよ。な、神月?」

「うん。それと、君も私の事を名前で呼んでくれて良いからね? あの傲慢親父とは

違って、君とアルヴェインさんとは仲良くやっていけそうな気がするから、苗字の方で呼ばれるよりは名前の方で呼ばれた方が何だか嬉しいからね」

「そっか。それじゃあ遠慮無く呼ばせてもらうけど、お前も俺の事は名前で呼んでくれて良いからな？」

「うん、分かった。それじゃあ改めてよろしくね、暖士、アルヴェインさん」

「ああ、こちらこそよろしくな、鈴歌、アルヴェインさん」

「こちらこそよろしく、暖士君、鈴歌さん」

そんな言葉を交わしながら改めて握手を交わすと、何故か突然二人から妙な懐かしさのような物を感じた。

……二人とはここで初めて会ったはずなのに、何でそんな感じがするんだろう……？
同じ高校二年生の鈴歌ならまだしも、歳が一回りくらい離れてる感じがするアルヴェインさんと会う可能性なんてそうそう無いよな……？

鈴歌とアルヴェインさんから感じた懐かしさのような物に対して疑問を抱いていると、鈴歌とアルヴェインさんも少し不思議そうな様子で軽く小首を傾げたり記憶を探るように顎に手を当てながら考え込んでいた。

やっぱりか……という事は、俺達は昔どこかで会った事が——。

疑問が確信に変わろうとしていたその時、薄暗かった空間が急にパツと明るくなり、

それと同時に俺達の近くに目元だけ隠れる形の白い仮面を被ったシルクハットに燕尾服という出で立ちの細身の人物が現れていた。

「えっ……!?!」

「だ、誰……!?!」

その人物の登場に俺達が強い警戒心を抱いていると、その人物は無言で俺達の事を見回した後、突然両手を大きく上げながら空間中に響き渡るほどの声で話し始めた。

「レディース&ジェントルマン！ ようこそ、この私——ドリーマーが作り出した夢の世界へ！」

「夢の世界……?」

「その通りだ！ ここはいつも君達が眠っている時に見ているような夢と同じ空間で、君達は私に選ばれた事でここにいます。つまり、君達の体自体は現実世界でグッスリ眠っているから今のところはまったく心配はいらないという事だ」

「なるほど……でも、どうして私達なの？ 私達六人に何か共通点があるようには——」
鈴歌が疑問を口にしていたその時、それを遮るように丑三さんがズイツとドリーマーの目の前に立ち、怒りを孕んだ大声を上げ始めた。

「貴様がこんなふざけたところに連れてきた犯人か！ さつさとこんなわけの分からぬ事は止めて、私を解放しろ！ 私はお前のような狂ってる奴に関わっている暇など無い

のだからな！」

「……………」

「おい！ 聞いているのか！」

丑三さんが今にも掴みかかろうとしている中、ドリーマーが落ち着き払った様子で「……………少しだけお静かに願おう」と呟いた直後、丑三さんの口が本人の意志とは関係なく徐々に閉じていき、最後にはまるで糊で固めたかのように丑三さんの口は開かなくなっていた。

「むぐ……………!? むぐ、むぐぐ……………!!」

「……………」安心を。話を終える頃には、また口が開くようになるので、それまでは静かにしていてくれたまえ」

そして、丑三さんから俺達の方へ視線を移すと、ドリーマーはニヤリと笑いながら再び話し始めた。

「さて……………それでは、そろそろ本題に移るとしよう。これからここにいる君達六人には、とあるゲームに参加してもらおう」

「ゲーム……………だと?」

「ああ、そうだ。ルールは至って簡単だ、私が作り出した四つのステージ——アトラクションをクリアしてくれればそれで良い。クリアの方法は、そのアトラクションによつ

てそれぞれ異なるが、スタート時にはアナウンスをさせてもらうので、そこは安心してくれ。そして、全てのアトラクションをクリアした者は、無事に現実世界に戻すと約束しよう」

「……クリアをすれば、この夢から覚めるのはわかった。ただ、さつき鈴歌が訊こうとしていたけど、どうして俺達なんだ？」

「そ、そうだよ！ どうして私達なの？ 私……こんなこわーいゲームに巻き込まれる理由なんて無いのに……」

俺の他に茶色のセミロングヘアのセーラー服姿の女子学生が問い掛けると、ドリーマーはクスクスと笑いながらそれに答えた。

「選んだ理由かね？ そんなのは簡単だ、君達で無ければいけないからだよ。気付いてはいないだろうが、この夢の世界——『エンドレスドリーム』の初来場者にピッタリな共通点があるのだからね」

「初来場者……？」

「ああ。先程、アトラクションという単語を使ったとおり、ここは夢の世界に作り上げた新感覚の遊園地みたいな物なのだよ。ここにあるアトラクションは、そのどれもが君達がか心から楽しめる物ばかりだと自負しているよ」

「遊園地……それなら別に危なくは無いか……」

「なーんだあ……真央、さっきまでスゴく怖かったけど、遊園地みたいな物だつて言うならスゴく安心かも♪」

スーツ姿の男性達が安堵の声を漏らす中、ドリーマーは怪しい笑みを浮かべながらうんうんと頷いた。

「その通りだよ、九鬼拓門君、王賀真央さん。入場料が君達の命という点を除けば、少し風変わりな遊園地と言えるからね」

「そうそう、入場料が命——つて、はい?」

「命つて……あの命?」

「そうだ。アトラクションのクリア条件を満たしていない者は、次のアトラクションへと進めずにそのまま命を失う。そして、アトラクションの最中に起きる様々なイベントの中でも君達の命が失われる事がある。まあ、『エンドレスドリーム』内でどんな死に方をしようとも現実世界では、ただの心臓麻痺にしかならないから、その点は安心してくれたまえ」

「いやいや! それのどこが安心できると言うんですか!?!」

スーツ姿の男性——九鬼さんが驚愕の表情を浮かべながら大声を上げるが、ドリーマーはとてども楽しそうな様子でクスクスと笑っているだけだった。

入場料が俺達の命……でも、それなら参加をしないと云えば良いだけなんじゃ……?」

そんな疑問が頭を過ぎった直後、ドリーマーの視線が俺へと移ったかと思うと、ドリーマーはニヤリと笑いながら話し掛けてきた。

「確かに参加をしなければ済む事だが、この場に招かれた時点で君達が目覚めるには、この世界の創造主であり管理人でもある私の許可が必要となっている。よって、参加をしないという選択肢は無い。まあ、参加をしないというのなら、アトラクションに挑戦すること無くこの場で死ぬ事になるだけだ」

「……つまり、俺達に拒否権は無い、って事か……」

「そういう事だ。さて……他に質問はあるかね？ 無ければ、そろそろアトラクションに挑戦してもらおうと思うんだが……」

ドリーマーが俺達の事を見回しながら問い掛けると、「はい」と隣に立っていた鈴歌が手を上げた。

「君は……神月鈴歌さんか。何かね？」

「私達がこのゲームに参加するメリットはあるの？ いきなり連れて来られた上、死ぬ可能性があるゲームに無理やり参加させられて、参加しないと殺すなんて言われるのは、明らかに不公平でしょ？」

「ふむ……なるほど、誰かはそう問いを投げかけてくるとは思っていたが、まさかそれが君だったとはね」

「……その言い方、まるで誰かがそれを訊いてくる事が決まっていたかのようにも聞こえるけど?」

「それについては、ノーコメントとさせてもらおう。最初から手札を晒しすぎるのは、愚者のする事だからね。さて、君達が参加するメリット、だったね……では、こうしようか。このゲームをクリアした者には、私の正体を明かした上に一つだけ願いを何でも叶えられる権利を与えよう」

その瞬間、俺達三人を除いた全員の表情が一変した。ドリーマーの力で喋れない丑三さんは、欲望に満ちたギラギラとした目をドリーマーに向け、さつきまで怖がっていた王賀さんは、薄ら笑いを浮かべながら「願い……何でも……い」と呟いた。そして、さつきから気の弱そうな様子を見せていた九鬼さんも「願い……叶えられる……!」と小さな声で言いながら嫌らしい笑みを浮かべていた。

……この三人は危険だな。協力し合う事も時には大切だけど、この三人についてはもう少し様子を見てから情報共有なんかを行った方が良くもしいかな。

丑三さん達の事を見ながらそう考えていた時、両肩にポンツと手が置かれる感触があり、そちらに視線を向けると、鈴歌とアルヴィンさんが俺の顔を見ながらコクンと頷いた。その二人の様子から同じ事を考えていると悟り、それに続く形で俺も二人に頷き返した。正直な事を言えば、願いが叶えられる権利はどうだって良い。今はアトラクシヨ

ンとやらをクリアして、ドリーマーの正体をしっかりと探った上で生きて帰る事が重要だ。

「……必ず生きて帰ろう、皆で協力して」

「うん」

「ああ」

俺達はもう一度頷きあつた後、誓いを立てるように拳をコツンとぶつけ合った。必ず生きて帰るために脱出しようとする俺達、そしてそれぞれの願いを叶えるためにここを脱出しようとする丑三さんや王賀さんという二つの集団に対し、ドリーマーはどのような思いを抱いたかは分からないが、ドリーマーの方へ視線を戻すと、ドリーマーはニヤリと笑いながら静かに口を開いた。

「それでは、そろそろゲームを開始しよう。ゲームのスタート地点は、それぞれバラバラになっていくから、協力し合うつもりがあるなら、まずは合流する事を目標にするのが一番だろうな。では、諸君。また君達と出会える事を楽しみにしているよ」

そのドリーマーの言葉と同時に、俺達の視界は突如強い光に包まれていき、やがて意識もその光の中へと消えていった。

第1章 深淵高校

第2話 合流

「あ、あれ……ここは……？」

目を開けると、俺はさっきまでいた空間では無く、どこかの建物の廊下の真ん中に一人で立っていた。そして、周囲の物音などに注意を向けながら見回してみると、近くには横に開くタイプの扉が付いた大きな部屋と少し大きな窓があり、部屋の中には綺麗に並べられた机の椅子が見え、それを見た瞬間にここがどこなのかを理解した。

「……もしかして、ここは学校か……？」

眩くようにそう疑問を口にしたその時、聞き慣れたチャイムの音が突然鳴り響き、チャイムの音が鳴り終わると同時に、このゲームを仕掛けてきた人物——ドリーマーの楽しそうな声が聞こえてきた。

『ようこそ、諸君。ここがファーストステージの『深淵高校』だ。この『深淵高校』は、見えての通り廃校をモチーフとしたホラーハウスなのだが、この『深淵高校』には諸君らの行く手を阻む様々な謎とエネミー達が待ち構えている。謎が解けない事で死ぬ事は

無いが、エネミー達に見つかり捕まってしまうたら最後、諸君らは無残な屍へと姿を変え、この校舎内に隠された鍵を手に入れ、どこかにある出口から抜け出す、ただそれだけだ。そのため、脱出の定員人数などはこのステージには設けていない。ただ、出口も鍵もすぐには見つからない場所にあるため、隅々まで念入りに探す事をオススメするよ。

さて……そろそろ放送を終えるでしょう。では、諸君らの健闘を祈っているよ」

ブツリという音と共にその放送が終わると、廊下は再び静寂に包まれたが、さっきの放送の効果もあつてか、その静寂が俺にとつてはとても怖い物に思えた。

……隠された鍵と出口、襲ってくるエネミー、そして謎か……。運動は好きだから探索するのは問題ないし、謎解きは結構得意な方だけど、問題はそのエネミーっていうのが何かだよな……。

「……仕方ない。とりあえず今俺がいるのが何階なのかを確認して、それから鈴歌れいかとアルヴィンさんと合流しよう。それと……ここの地図も必要だけど、それは二人と合流してからでもまだ間に合うだろうし、まずは少しでも探索を試みよう」

当面の動きについて口に出しながら確認をし、自分を奮い立たせるためにコクンと頷いた後、俺は異様な雰囲気立ちこめる『深淵高校』の中を一人で歩き始めた。

歩き始めてから数分後、目の端に上下に繋がる階段のような物を見つけ、息を潜めながらそこへと近付くと、階段の近くに『2F』と書かれたプレートが見えた。

「2F……つまり、ここは2階か。よし……しばらくはここを拠点にしておこう。ここならドリーマーが言うエネミーって奴に追われても1階や3階に逃げ込む事が出来るし、いざとなれば向こう側から別の階に行く事も出来そうだしな」

まだ向こう側に別の階に続く階段があるのは確認していないし、たとえあっても階段が途切れている可能性もまだあるけれど、とりあえずはここを拠点にするのが安全な気がする。このゲームは、セーブもロードも残機も無いという正真正銘一回きりのゲームだから、慎重に動くのが一番だ。

生きて帰ると決めたからには、絶対に生きて帰りたいからな。だから、このファーストステージで躓いてるわけにはいかないんだ。

「さて……ここを拠点にするのは確定として、次はどう動いたものか……」

次の動きについて考え始めたその時、1階に続く階段からコツコツコツという足音が聞こえ、俺は再び息を潜めた。そして、その足音の主の正体を探るために階段の陰に身を潜め、足音の主が近付いてくるのをジツと待っていたその時、「うう……ここ、結構怖いなあ……」という少し震えた声が聞こえた。

この声……もしかして、鈴歌か？

声だけを聞けば、ほぼ間違いなく鈴歌なのだが、ドリーマーが仕向けてきたエネミーが鈴歌の声をコピーしている可能性もあったため、その声の主が2階へ上がってくるのをただ待っていた。そして、足音がすぐ近くで聞こえたと感じた瞬間、俺は足音がした方へ向かって「……鈴歌か？」と声を掛けた。すると、「ひうつ!？」という声が聞こえると同時に、パタンツという大きめな足音が静寂に包まれた廊下に鳴り響き、俺はそれらに多少慌てながら周囲の物音に注意を向けた。しかし、運が良かったのかエネミーはおろか、誰かが近付いてくるような音は聞こえず、それに対してホッと胸を撫で下ろしながら小さな声で話し掛けた。

「鈴歌……俺だよ、暖士だ」

「だ、暖士……?」

声を震わせながら声の主——神月鈴歌しんづきれいかはこちらを覗き込むと、安心と怒りが半々といった表情を浮かべながら小さな声で話し掛けてきた。

「暖士……もう、驚かささないですよ……!」

「ゴメンゴメン。けど、エネミーっていう奴の正体分からない以上、こうやって陰に潜まないとどうにもならないからさ」

「それはそうだけど……でも、こうやって合流できたのは本当に嬉しいよ。例のエネ

ミーがいるような様子は無かったけど、少し歩いてみても誰かがいるような気配すらしなかったから、怖かったし心細かったんだよね……」

「そうだろうな。でも、ここからは大丈夫だ。俺がお前の傍についてるし、何かあった時には守ってやるからさ」

「暖士……うん、ありがとうね」

「どういたしまして」

安心感に満ちた様子の鈴歌と笑い合っていたその時、廊下の向こうから何やら怒鳴り声のような物が近付いてくるのが聞こえ、俺達は頷き合った後に3階に上がる階段の陰に身を潜めた。そして、怒鳴り声は近付いてくる度に徐々にその音量が増していき、すぐ近くまで来た頃には、思わず耳を塞いでしまうほどだった。

「くそっ！ あのドリーマーという男は、本当に何なのだ!? この私をこんな薄汚い暗闇に閉じ込めた挙げ句、謎解きだの出口を探せだのふざけた事を言いよって！ 私がこのゲームをクリアした暁には、あの男の正体を暴いた上で訴えを起こしてやる！」

丑三さんは怒り狂った様子で俺達の目の前を通っていくと、そのまま1階へと大きな足音を立てながら降りていった。そして、足音が遠ざかっていった後、俺達は1階へ繋がる階段を覗き込みながら同時に溜息をついた。

「……丑三さん、同じ階にいたんだな……」

「そうみたいだね。はあ……さつき暖士に会えたのは、本当に良かったかもしれない。あのまま1階にいたら、エネミーに捕まる前にあの傲慢親父に捕まって、アイツの代わりに鍵を探さないといけなくなつてたかもしれないし……」

「それは……まあ、ありそうだよな。というか、あの人は最悪の場合他の参加者を犠牲にしてでも生き残ろうとしそうだよな。自分は他の奴らよりも価値のある人間だからとか愚民は自分の言う事に従つてればいいとか言つてさ」

「……うん、そうだね。はあ……そう考えると、あの傲慢親父は味方というよりは、ある意味エネミーよりも厄介な敵かもしれないね」

「まつたくだな……」

そして、俺達はまた同時に溜息をついた。

本当ならそういう事を言わずに丑三さんとも協力すべきなんだろうけど、さつきまでの言動から考えると、丑三さんと協力し合うには相当な努力と覚悟が必要な上に丑三さんが冷静になつていないといけないため、その実現まではもう少し時間が掛かりそうだった。

さて……それについてはとりあえず置いておく事にして、今はアルヴィンさんとの合流を最優先に――。

そう思いながら再び2階に上がろうとしたその時、今度は3階の方からコツコツコツ

という足音が聞こえ、俺達は頷き合った後にそのまま1階へ下りる階段の陰に身を潜めた。そして、3階から降りてくる足音が近付いてくるのをジツと待ち、コツンという音と共に足音の主が2階に降りてきたと感じた瞬間、「……あれ？ 誰もいない……？」と不思議そうに言う声が聞こえ、その声に俺と鈴歌は顔を見合わせた。

「この声つてもしかして……」

「ああ、そうだと思う。よし……とりあえず鈴歌の時と同じように声を掛けてみよう」
「うん」

決意を固めた様子で頷く鈴歌に対して頷き返した後、俺は少しでも体を前に出し、声が聞こえた方へと話し掛けた。

「……アルヴィンさん、ですか？」

「……え？ その声は……暖士君かい？」

「そうです。今、階段の陰に隠れてるので、こっちに來てもらえますか？」
「……分かった」

声の主——アルヴィン・タイさんは静かに答えると、そのまま俺達がいる方へと歩いてきた。そして、俺達の姿を確認すると、とてもホツとした様子を見せ、ニコリと笑いながら話し掛けてきた。

「良かった……二人とも無事だったんだね」

「はい、何とか……アルヴィンさんもご無事で何よりです」

「ふふ、ありがとう。ところで、さつき丑三さんの声が聞こえたような気がしたんだが、丑三さんは一緒じゃないんだね？」

「あ、はい。丑三さんを見掛けた事は見掛けたんですけど、3階の陰に隠れていた俺達の目の前を怒鳴り声を上げながら通りすぎって行って、そのまま1階へ下りて行ってしまったので、それ以降の事はサツパリですね……」

「あの声はスゴく大きかったから、それでエネミーがこつちに來たらどうしようかと思いましたよ」

「ははっ、それはそうだろうね。けど、たぶんそれは大丈夫じゃないかな？」

「というと？」

「今のところ、まだ誰もエネミーに襲われていないからだよ」

「誰もエネミーに襲われていないから、ですか？」

「ああ。ドリーマーが言っていたエネミーが、このステージ内を徘徊するモノだとすれ

ば、今鈴歌さんが言った通り丑三さんの声を聞きつけてこつちに寄ってきたと思う。ま

あ、この『深淵高校』の広きなんかはまだ分かっていないけど、さつきの丑三さんの声は3階にいた私にも聞こえてくるほど大きな物だった。なのに、エネミーが寄ってこないという事は、少なくともスタート位置やその周辺にはエネミーがいないという事にな

る。ドリーマーがあくまでもこれをゲームだと言うのなら、スタート直後に参加者がエネミーに襲われて死亡するという展開は、あまり好ましい物ではないはず。もし、エネミーがスタート位置やその周辺にいたならば、危険を考えずに大声を上げる丑三さんや気の弱さから動き出すまでに時間が掛かってしまう九鬼くきさんのような人がすぐに捕まってしまうからね。もつとも、こういったホラーを扱ったゲームだと、物語の開始時には敵がすでに動いていてそれが出した音なんかをプレイヤーか誰かが聞きつけるなんて事もある。けれど、さっき上げた理由から今回のゲームのエネミーは何らかの条件で動き出すモノなんじゃないかと私は思っているよ」

「何らかの条件……良くあるのは、ある特定の部屋を開けるとか何かの封印を解くとかですよね」

「そうだね。だから、今のところはまだ大丈夫だと思うけど、探索中は怪しい物や部屋が無いか注意をしながらした方が良いかもしれない。ドリーマーの考えがまだ明確に分からない以上、どこに謎解きや攻略に必要なアイテムがあるかは分からないが、罠が仕掛けられている可能性も無くはないからね」

「そうですね。後は他の参加者達との情報共有や探索中の協力ですけど、これも慎重に行った方が良いでしょうね？」

「……彼らには申し訳ないが、その方が良いでしょうね。彼らも私達と同じ参加者ではあ

るが、ドリーマーがクリアの報酬を事に口にした瞬間の彼らの反応を見る限り、脱出の定員人数が無いとは言え、私達を出し抜いて犠牲にしても生き残ろうとする可能性も考えられる。だから、彼らの言動にも注意をしておいた方が良いね」

「分かりました」

アルヴィンさんの言葉に対して鈴歌と一緒に頷きながら答えた後、俺達は再び薄暗い『深淵高校』の廊下へと視線を移した。ここに飛ばされた直後は、この薄暗さと静けさ、そして異様な雰囲気になんか怖じ気つきそうにはなつたが、鈴歌とアルヴィンさんと合流した今となつては、その怖さも薄らいだような気がした。

「さてと……それじゃあそろそろ探索を始めよう。探索の方針なんかは……歩きながら決める事にしても良いですよね？」

「そうだね。先に方針を決めても良いけど、歩きながらの方が情報が集まりやすいだろうからね」

「ですね。よし……それじゃあ早速出発しよう」

「うん」

「ああ」

鈴歌達の返事を聞いた後、俺達はファーストステージである『深淵高校』の中をゆつくりと歩き始めた。

第3話 探索開始と新たな手掛かり

鈴歌達と無事に合流して探索を開始した直後、俺達はまず探索面においての目標を立てる事にした。その理由は二つ、一つは予め目標を立てる事で、探索中に指針などがぶれないようにするため。そしてもう一つは、たとえエネミーに追われてバラバラになってもその目標の下に再集合しやすくするためだ。まだこの『深淵高校』の地図も持つてなく、ここがどれだけ広いのかが分からない以上、集まりやすくするための工夫や探索を有利に進めるための方法は考えておかないとすぐに全滅してしまう可能性がある。なので、こうして探索を本格的に始める前に目標を決めておく必要があるのだ。

「さて……まずはこの地図を手に入れたいですよね」

「そうだね。そして、出来れば人数分欲しいところだが、ドリーマーがそこまで親切かどうかは分からないし、とりあえず一枚は確実に手に入れたいかな」

「地図……ありそうなのは、昇降口か職員室だと思えますけど、どうして二人揃ってそんなに地図を重要視してるんですか？ 探索してる内にどこにどの教室があるかなんて覚えちゃう気がするのに……」

「鈴歌の言う通り、この校内の様子は探索してる内に覚えられるかもしれない。けど、ドリーマーが言う謎解きがある以上、地図の存在はかなり重要になるんだよ」

「えっと……つまり、どういう事……？」

鈴歌が不思議そうに小首を傾げる中、俺は自分が考えている地図の重要性について鈴歌に話した。

「まず、地図がある事で助かる理由の一つ目は、ドリーマーの力が及ばない限り、どんな状況に陥ろうとも迷う事が無くなる事だ。この場合のドリーマーの力というのは、この『深淵高校』にある教室の位置を入れ替えたり教室自体を無くしたりみたいなものだ。もつとも、さっきのアルヴェインさんの仮説を借りるなら、ドリーマー自身はこれをゲームだと考えているはずだから、何かしらの違反行動を取らない限り、参加者達やゲーム自体に介入してこないだろうけどな。」

続いて二つ目、二つ目は情報の整理や共有がし易い事だ。こういうタイプのゲームで手に入る地図は、基本的に紙の地図が多い。だから、どこかの教室でペンも手に入れる事で、地図に各教室の情報を書き込む事も出来る。もつとも、携帯なんかには地図データがインストールされるパターンも無いだろうけど、ゲームの開始前と開始直後にその話が無かった事を考えると、このゲーム内で手に入る地図は、紙製の物なんだと思う」

「なるほど……でも、話してなかっただけで、実はって事もあるんじゃない？ ほら、携帯もこうして手元にあるわけだし」

鈴歌は立ち止まった後、スカートのポケットから携帯を取り出しながら言ったが、それに対してアルヴィンさんは哀しそうに首を横に振った。

「いや、どうやらその可能性は無いみたいなんだ」

「え、それって……？」

「……暖士君、恐らく君も携帯電話を持っているはずだから、鈴歌さんと一緒にそれぞれ確認してみてくださいるかな？」

「あ、はい」

「分かりました」

アルヴィンさんの言葉に従って制服のポケットに入っていた携帯を取り出し、何も考えずに携帯の電源スイッチを押した後に画面を確認した。すると、そこに映っていたのは――。

「……何だ、これ……！」

「嘘………どういう事なの!？」

画面にはいつもの待受画面とは違い、青い背景に白い文字で大きく書かれた『D』の文字、そして電話とメールとブラウザの三つだけが表示されており、どれだけ他の画面

に移動してみてもそれは変わらなかった。

「電話とメール、そしてブラウザ……これ以外は、この『エンドレスドリーム』内では必要ないから使えないという事ですな」

「恐らくそうだろう。ゲーム開始直後、私も鈴歌さんと同じ事を考え、すぐに携帯電話を取り出し、今君達がやったように電源を入れてみた。しかし、私の携帯電話も同じ状態だった上、この『深淵高校』の地図データがメールで送られてくる事は無かった。つまり、暖士君が予想した通り、ここで手に入る地図は紙媒体の物に限られるのだろうね」

「そっか……それじゃあやっぱり探索中に地図を見つけるしか——あ、でもどうしてここでインターネットが使えるんでしょうね？」

「それなんだけどね……二人とも、これを見てくれるかな？」

そう言いながらアルヴィンさんが取りだした携帯の画面には、とあるページが表示されていた。

「インターネットは繋がるけれど、このサイト以外には行く事が出来ないみたいなんだ」

「これは……遊園地のホームページみたいですな。名前は……『ドリームアイランド』？」

「あれ……？ この名前、どこかで聞いた事があるような……」

「そう言われれば……でも、どこで聞いたんだっけ……？」

鈴歌と揃ってその遊園地の事について記憶を引っ張り出していたその時、記憶の奥底から『ドリームアイランド』に関する記憶が突然見つかり、「……あつー!」と俺達は同時に声を上げた。そして、同時に声を上げた事に対して少し気恥ずかしさを感じながら揃ってクスリと笑った後、俺は見つける事が出来た記憶について話を始めた。

「俺……この遊園地に行つた事があるみたいです。10年前、テレビか何かで特集をしていたのを偶然見て、母さんと一緒に行つてみたいねって話してたら、父さんが週末に連れて行つてくれて……」

「え、暖士も? 私もこの遊園地に行つた事があるよ、同じく10年前に……」

「そう……なのか?」

「うん。でも、流石に同じ日かは分からないから、出会ってないかもしれないけどね」

「まあ、そうだよな。因みに……アルヴェインさんは、この『ドリームアイランド』に行つた事はありますか?」

「……ああ、あるよ。今までに何度か行つた事はあるけど、私も同じく10年前にも行つた記憶はあるよ」

「なるほど……つまり、少なくともこの三人は10年前に『ドリームアイランド』に行つた事があるという事ですね」

「だね。となると……他の三人も『ドリームアイランド』に行つた事があるのかな?」

「そこまでは分からない。けど、もしそうだとすれば、ドリーマーが言っていた共通点はそれという事になるね」

「10年前に『ドリームアイランド』に行つた事がある六人……でも、10年前に何か特別なイベントとかキャンペーンとかがあつたような記憶は無いけどな……?」

「そうだよね……もし、何かイベントでもあつて、それに関係してゐるならまだ分かるけど、そうじゃなかつたら10年前の来場者から無作為で選んだ事になるし……」

「……ああ、そうだね。つまり、ドリーマーが言っていた共通点は、それだけじゃなくて他にもあるという事になるね。そして、ドリーマーは放送の中で出口や鍵を探す時は、隅々まで探す事を推奨していた。という事は、この『深淵高校』には私達の共通点に関するヒントも隠れていると暗に示しているのかもしれない」

「共通点のヒント……それが攻略に使えるのかは分かりませんが、こうなつたらそれも探してみた方が良さそうですね」

「ああ。このまま謎にしておく、モヤツとしたままで終わってしまうからね。二人とも、探索中は謎解きや攻略に使えるアイテム以外にもこの事についても探してみる事にしよう」

「はい」

アルヴィンさんの言葉に頷きながら返事をしていたその時、俺達の視界にもう一つの

階段が入り、俺達はそこでひとまず立ち止まった。階段は俺が予想していたような崩れた物では無く、最初に見つけた階段と同じようにしつかりと1階と3階の両方にいけるようになっていている物だったため、その事に対して心の中でホツとしていた。

「階段……ここまで来る間に職員室らしい部屋が無かった事を考えると、1階か3階のどちらかにあると見て良いみたいですね」

「そうだね。そして、二人と合流する前に3階も一応見て回ってみたけれど、それらしい部屋は無かった。つまり、職員室は1階にあるという事になるかな」

「1階……それなら、昇降口も一緒に調べてみましょうか。もちろん、ドアが開くわけは無いですけど、下駄箱にも何かアイテムかヒントがあるかもしれないですね」

「ああ、そうだね。よし……それじゃあそろそろ1階へ降りてみようか」

「はい」

そして、ゆっくり1階へ降りた後、軽く周囲を見回してみると、向かって右側には2階で通ってきたような廊下が続き、左側には一枚の引き戸がある他、その向こうには渡り廊下のような物が見えていた。

「渡り廊下があるという事は、その向こうには体育館みたいな物がありそうですね」

「体育館かあ……こんな時じゃなかったら、思う存分運動したいけど、今はそれどころじゃないもんね」

「まあ、そうだけど……そう言うって事は、運動が好きなのか？」

「うん！ 私、こう見えてもバスケットだからね。言ってみれば、体育館は私のホームみたいな物かな？」

「そっか。俺はサッカー部だから、どちらかと言えばグラウンドがホームになるかな？」

「ふふ、そうかもね。そういえば……アルヴィンさんは、学生時代は何部でしたか？」

「そうだね……私はあまり運動は得意じゃなかったから、二人とは違って文化部だったよ」

「あ、そうだったんですね。何だか運動が出来そうなイメージだったので、ちょっと意外です」

「あはは、学生時代はよく言われたよ。ただ、その分謎解きでは活躍できるように頑張るつもりだから、期待しててくれ」

「分かりました。俺も謎解きは得意な方だと思うので、いざという時には頼って下さいね」

「ああ、そうさせてもらうよ。もちろん、鈴歌さんにもね」

アルヴィンさんがニコリと笑いながら答える中、それを聞いていた鈴歌が少し申し訳なさそうな様子を見せた。

「あ……えっと、二人には申し訳ないんだけど、実はあまり謎解きとかクイズとかは得意

じゃないんだよね……」

「え、そうなのか？」

「うん……運動とか歌うのとかは得意だから、体育や音楽の成績は良いんだけど、5教科の方があまり良くなってね……。あ、でもその分私は探索面で活躍できるように頑張るつもりだから、そっちは任せてね」

「ああ、そうさせてもらおうよ。まあ、それぞれ得意不得意はあつて当然だから、本当はあまり気にしなくても良いと思うけどな」

「それはそうなんだけど……やっぱり活躍出来ないタイミングがあるのは、何だか悔しいでしょ？ 自分は他の面で頑張れば良いって思つてもどこか辛いつていうか……」

「うーん……その気持ちは分からなくは無いけど、やっぱりどの面でも活躍出来る万能な奴なんてそうそういないだろう？ 俺は謎解きみたいな頭使う事でも探索面でも力にはなれるけど、二人みたいにとっちかに特化してるわけじゃないから、その分どこかで活躍出来ないタイミングが出てくると思う。だから、ここはそれぞれの得意分野で活躍出来る事に誇りを持っていくのが一番なんだよ。そして、自分の欠点は生きて帰つてから克服していく。俺はそれで良いと思つてるぜ？」

「自分の得意分野で活躍出来る事に誇りを持つ、か……うん、そうだね。このままくよくよしててもしょうがないし、今は生きて帰る事が一番だもんね」

「ああ、そうだ。それに、バスケもサッカーも今だつてチームワークや役割分担が大事だろ？ まあ、それと比べるのはちよつと違うかもしれないけどさ」

頬をポリポリと搔きながら言うと、鈴歌は目を閉じながら首を横に振った。

「ううん、暖士の言う通りだよ。お互いの苦手分野をカバーしあつてこそそのチームだもん。その中で出来る事があるなら、今はそれに対して全力でやるだけ。だから、私はこの運動神経を活かして二人の役に立てるように頑張つていくよ。それが今の私に出来る事だからね」

「鈴歌……ああ、分かった。けど、無理だけはするなよ？ 大事な仲間を失うのはとても辛いからな」

「うん、分かつてるよ。でも、それは君だつて同じなんだからね？ 大事な大事な私達のリーダーさん？」

「リーダーつて……俺はそういう器じゃないんだけど？」

「ううん、私達のリーダーは暖士にしか務まらないよ。アルヴィンさんもそう思いますよね？」

「うん、そうだね。年上である私が言うのもアレだが、暖士君のその人をまとめ上げる能力や人柄は、私よりも遙かに優れていると思つている。だから、このチームのリーダーは暖士君にこそ相応しいと私も感じているよ」

「アルヴィンさんまで……はあ、分かりました。そこまで言われて嫌だとも言えませんし、言っている時間ありませんから。けど、あくまでもリーダーなのは役割としてなので、謎解きや探索面の相談なんかは普通にさせてもらいますからね」

「ああ、もちろんだ。リーダーを君に任せる以上、鈴歌さん同様全力で君のサポートをさせてもらうよ」

「はい、お願いします。あ、それと……今の内に、それぞれの連絡先を交換しておきませんか？ どういう原理かは分かりませんが、電波も入っていて電話やメールが使えるとなった以上、連絡手段があるならそれを使わない手は無いと思うので」

「ふむ……それもそうだね。はぐれても大丈夫のように探索面の目標は立てているとは言え、必ずしも合流出来るわけでは無いし、はぐれた先で何かを見つけた時にすぐに報告出来るからね」

「それに、お互いの安否が分かるならそれに越した事は無いからね」

「そういう事。という事で……そろそろ探索も再開した方が良さし、早速やっつけようか」

「うん！」

「ああ」

そして、しっかりとお互いの連絡先を交換した後、俺達は横に一列に並びながら一階

の探索を始めた。さっきまでいた2階は、二年生の教室が並んでいたが、この1階には一年生の教室が並んでおり、当然だがどの教室もシーンと静まりかえっていた。

「ここは……どうやら教室棟だったみたいですね」

「ああ。となると、どこかに特別教室棟に繋がる道があるのかもしれないね」

「教室棟に特別教室棟……それに体育館まであるって事は、この『深淵高校』の敷地は結構広いのかもね」

「そうだな。ただ、これで旧校舎なんてのもあつたらと思うと、結構キツイけどな」

「う……確かにそうだね。そうになると、探索エリアが四箇所になるから、尚更連絡手段が必要になってくるね」

「確かにな……ん？　もしかして、携帯が使えるのはそういう理由があるからなのかな？　例えば、各ステージの行動できる範囲が広いからとか連絡手段が必要になるタイミングがあるからとか」

「なるほど……それは一理あるね——つと、二人とも、どうやら着いたみたいだよ」

アルヴィンさんの声で立ち止まり、ゆっくりと右の方へ体を向けると、そこには『職員室』と書かれたプレートが嵌まった部屋があり、目の前にある引き戸に軽く力を入れてみると、どうやら鍵は掛かっていなかったらしく、引き戸はいとも簡単に開いた。

「鍵が掛かっていない……って事は、ここは本当に最初の頃に必ず来る事になる場所

だったみたいだね」

「みたいだね。でも、職員室の中に罨が仕掛けられてる可能性はあるし、慎重に進んでいいだろう」

「ああ、そうだな。よし……それじゃあそろそろ中に入ろう」

「う、うん……！」

「ああ」

そして、揃って中へ入ってみると、職員室の中には各教師の机の他に様々な本が収まった本棚やコピー機などの機材、そして各教室や特別教室の鍵がしまわれているであろうキーボックスなどがあった。

「職員室……普段なら世話になる事は少ないけど、今回ばかりは何度も世話になりそうだな」

「そうだけど……私、この職員室の独特な雰囲気あまり好きじゃないんだよね。特に怒られる事をしたわけじゃないのに、スゴく入りづらいし緊張もするから……」

「あ……なんか分かる気がするな、それ。職員室って普段はあまり用が無い分、入る時にはスゴく緊張するし肩に力が入るんだよね」

「そうそう。それで、出る時には肩の力がスーッと抜けて、それと一緒に緊張も解れるんだよね」

「だな。因みに、アルヴィンさんは学生時代に職員室に入る時って緊張はしてましたか？」

「そうだね……していた事はしていたけど、授業で分からなかったところをよく訊きに行っていたせいとか、途中から職員室の雰囲気緊張する事は減っていたかな？」

「な、なるほど……」

「……分からなかったところを自分から訊きに行くなんて、今まで一回もやった事が無いかも……」

「あれ……そうかな？ 周りにはそういう生徒が多かったから、それが普通だと思っていたんだが……？」

不思議そうに首を傾げるアルヴィンさんの姿に、俺と鈴歌は苦笑いを浮かべた。

「……この様子だと、アルヴィンさんが通ってた学校って、たぶん……」

「うん……私達を通つてるところよりも絶対にレベルが高いところだよな」

「……だよな。まあ、それはさておき……まずはどこから探そうか？」

「そうだね……地図があるとすれば、あの本棚か他の棚のどれかだろうけど、キーボードも気になるところかな？ ここに来るまでに教室内は確認してないけど、たぶん鍵が無いと開かない教室もあったと思うし」

「だな。それじゃあ……は——」

職員室内の探索についての指示を出そうとしたその時、職員室内に置かれていた黒電話が突然鳴り出し、俺達の視線は一斉に黒電話へと注がれた。

「……このパターンは、もしかして……」

「……ああ。私達の予想が合っているとすれば、いつでも逃げられる準備はしておいた方が良いだろうね」

「逃げられる準備って……まさか!？」

「……ああ、この『職員室に入る』という行動が、エネミー出現のスイッチだったかもしれないって事だ……!」

こういう時に出て来る敵は、この部屋の中でしか追いかけてこない事が多い気がする。けれど、そういう時に多いのは敵から一定時間逃げ切らないとドアに掛かった鍵が開かないパターンだ。つまり、本当にエネミーが出て来るなら、この逃げづらい室内で三人が逃げ切るための工夫が必要になるのだ。

……でも、電話に出ないわけにはいかないし、ここは覚悟を決めて出てしまうのが一番かもしれないな。

ただ大きな音で鳴り響く電話の音に薄らと恐怖を感じながらも俺は電話を取る覚悟を決め、鈴歌とアルヴィンさんに目配せで逃げられる準備を整えるように指示を出した後、一度深呼吸をしてから静かに受話器を取った。

「……もしもし?」

『ククク……ごきげんよう、甲斐暖士君。神月鈴歌さんという可愛らしい仲間とアルヴィン・タイ君という賢さを備えた仲間との探索は順調かな?』

「……その声は、ドリーマー……か?」

『That's right. 他の参加者達とは違って、君達はある事に気付いたようだから、それについて賞賛の言葉を掛けようと思つてね。クク……君達をこのゲームに参加させたのは大正解だったよ』

「……褒められても素直には喜べないな。それで、この電話はただそれだけのために掛けてきたのか?」

『ああ。君達はこの電話が合図となつて、エネミーが出現すると思つていたようだが、エネミーはここでは無い別の場所にいるよ。ただ、彼は結構寂しがりだからね……もし、君達が会いに行つてくれたら、彼は君達の事を大歓迎してくれるだろう。親愛のハグや挨拶のための握手でね』

「……大歓迎じゃなく、親愛の情を込めた殺人の間違いだろ? ところで、さつき言つていたとある事つていうのは、『ドリームアイランド』の事か?」

『そうだ。『ドリームアイランド』はとても良い遊園地だったのだが、残念ながらも閉園してしまつているのだよ。まあ、それはあのページを更に下の方まで見ていけば分か

る事だがね。そして、君達が考えている六人の共通点は半分は合っているよ。ただ、それはあくまでも半分であり、君達三人の繋がりとは違うがね』

「俺達三人の繋がり……？ それって——」

『おっと、それ以上は流石に答えられないな。ここから先は、探索を進める中で見つけてくれたまえ。尚、君達が探している地図は、いずれかの教師の机の上であり、キーボックスにはしっかりとダイヤル錠が掛かっている。だから、当面の課題はキーボックスのダイヤル錠を外す事になるだろうね』

電話の向こうでドリーマーが楽しそうに話す中、俺はドリーマーとの会話の内容に違和感を覚えていた。

「……いやに親切だな。そんなにヒントを与えていたら、ゲームにならないんじゃないのか？」

『いや、なるさ。これはあくまでも君達へのボーナス特典だからね。さて……それでは、そろそろ電話を切るとしよう。これ以上、君達の探索の邪魔をするのは良くないからね。では、また会える時を楽しみにしているよ、頼り甲斐のあるリーダーの甲斐暖士君』
その言葉を最後にドリーマーからの電話は切れ、俺はそれと同時に受話器を静かに置いた。

俺達三人の繋がり……？ 俺達には何か共通点とは違う何かがあるというのか……

?

ドリーマーとの会話で新たに浮かんだ疑問について考えていると、不意に肩を軽くポンポンと叩かれ、それに対して「え？」と言いながら振り向くと、そこには不安そうな表情を浮かべる鈴歌がいた。そしてよく見てみると、その手には地図のような紙を三枚と小さなプレートが付いた鍵が一つあり、俺達の会話が鈴歌達にもしつかりと聞こえていた事が分かった。

「鈴歌……どうした？」

「暖士、さっきの会話の時もそうだったけど、何だか怖い顔をしてたよ？」

「怖い顔って、そんなにか？」

「えっと……顔自体はそんなに怖いわけでは無いけど、何だか雰囲気怖かったせいか、顔も少し怖い感じに見えた……かな」

「……そっか、ゴメンな」

「ううん、別に良いよ。でも、ドリーマーの話について考え過ぎるのは、今は止めておいた方が良いと思う。ドリーマーが言っていた私達三人の繋がりに気がならないって言ったら嘘になるけど、それに意識を向けすぎても今度はこのゲームを突破する事が出来なくなるかもしれないから。だから、それはもう少し探索を進めてから一緒に考えよ？」

「……うん、そうだな。このヒントや証拠が少ない中で考えてもしょうがないし、今はこのゲームを攻略する方に集中した方が良いからな。鈴歌……本当にありがたいな」

「……ふふつ、どういたしまして」

ようやく安心したような笑みを浮かべる鈴歌に対して微笑み返した時、それを静かに見ていたアルヴィンさんがクスリと笑いながら話し掛けてきた。

「さて……それでは、そろそろ探索を再開しようか。先程、地図と一緒に『渡り廊下の鍵』が置いてあったから、次は渡り廊下の先を探索するのが一番だろうね。それと、キーボックスにはドリーマーが言っていた通り、四桁のダイヤル錠が掛かっていたから、この職員室かどこかでそのヒントを見つける必要があると思うだよ」

「そうですね。ただ……ドリーマーがわざわざエネミーの事を話題にした事を考えると、エネミーがいるのもしかしたら……」

「渡り廊下の先、つて事になるよね……」

「ああ。だけど、とりあえず全力で逃げてしまえば大丈夫なはずだ。それと……無事に逃げ切れた後は、この職員室に集合しよう。当面はキーボックスを開ける事が目標になるから、そのためにも全員で協力しながら進めて行きたいからな」

「うん、分かったよ、暖士」

「ああ、了解したよ、暖士君」

鈴歌達が頷きながら答えるのに対して頷き返した後、俺は鈴歌から地図を一枚と『渡り廊下の鍵』を受け取った。

「……よし、それじゃあ早速渡り廊下の方へ行こう」

「うん！」

「ああ」

鈴歌達の声に頼もしさを感じ、小さくクスリと笑った後、俺は鈴歌達と一緒に次の目的地である渡り廊下へ行くべく、職員室を後にした。

第4話 エネミーからの逃走

鈴歌達が職員室で見つけた『渡り廊下の鍵』を使うため、一緒に見つかったこの『深淵高校』の地図を見ながら俺達は先程通りがかつた1階の渡り廊下へとやって来た。渡り廊下に行く扉は、さっきと同じように閉じており、それを開けるために扉に軽く力を入れてみると、やはり鍵が掛かっているためかびくともしなかった。

「まあ、そうだよな。これで鍵を開けてもないのに開いたら、何のための鍵だつてなるし」

「確かにね。それにしても……この先にいるエネミーつて、本当にどんな奴なんだろうね……？」

「ドリーマーが言うには、寂しがり屋で私達を見つけ次第、ハグや握手を交わしにくるらしいが……」

「つまり、この『深淵高校』のエネミーは強い力で体や手などを押し潰す事で殺そうとしてくる何かつて事になりますね。問題は、そのエネミーが追いかけてくる時の速さですけど、そこは実際に出会わないと分からないと分かなそうですね」

「そうだね。さて……それでは、早速そのエネミーに会いに行こうか」

「はい」

そして、扉の鍵穴に『渡り廊下の鍵』を差し込み、そのまま左の方へゆっくり回すと、ガチャリという音を立てて鍵は開いた。コクリと領き合ってから扉を横に引き開けて外へと出てみると、そこには木製の少し長めの渡り廊下があり、渡り廊下の先には暗くて見えづらいものの、何やら大きな建物が静かにそびえ立っていた。

「さて……ドリーマーの言う事が正しいとすれば、あそこにエネミーがいるわけだけど、いざとなったら俺が囷になるから、二人はその間に全力で逃げてくれ」

「え……だ、ダメだよ……！ それなら、体力と速さに自信がある私の方が——」

「いや、ここは俺に任せて鈴歌は出来る限りアルヴィンさんと一緒に逃げて欲しい。逃げる時に離ればなれになる恐れがある以上、もしもの時に探索を有利に行えるようにしたいからさ」

「探索を有利に行う……?」

「そう。現時点で開いていると確定してる部屋は、さっきまでいたあの職員室だけだ。だから、教室棟にある教室の幾つかが開いていたとしても、先に地図を見つけに来ようとした事で、それがどれかはまったく分からない。加えて、たとえ偶然開いている部屋を見つけたとしても、そこに隠れられる場所が無かったり、見つけるまでに時間が掛かったりして最悪エネミーに捕まる可能性も大いにあるからな」

「なるほど……つまり、こんな異様な空間にいる上、エネミーという謎の存在に追いかけるられる事の恐怖から、判断力や冷静さを欠いてしまい、それが原因で捕まるというパターンもある。だから、運動能力に長けている鈴歌さんと私が一緒に組み、君と合流するまでの間に出来るなら徘徊するエネミーを警戒しながら探索をしておいて欲しいという事だね」

「はい。それに……鈴歌を——女子を一人にさせるわけにはいきませんからね」

「暖士……」

「まあ、これはあくまでも今一緒にいるのが、アルヴィンさんだからであって、これが丑三さんや九鬼さんだったら、もちろん組ませはしませんよ。信用が置ける大切な仲間を任せられるのは、同じく信用が置ける大切な仲間だけですから」

「なるほどね……ふふ、それなら私はしっかりとリーダーからの期待に応えようしようか」

「ありがとうございます、アルヴィンさん」

「どういたしまして。だが、私達にばかり気を回さずに君もしつかりと逃げ切ってくれよ、暖士君。君がそう思ってくれているのと同じように、私達も君の事を大事な仲間だと思っているからね」

「そうだよ、暖士！ 暖士はこのチームには欠かせない存在だし、暖士も揃って現実世界

に帰るからこそ意味があるんだからね！」

「アルヴィンさん……鈴歌……」

アルヴィンさんと鈴歌が掛けてくれた言葉で、胸の奥がぼかぼかしてくると同時に、これからに向けて活力とやる気が体中に満ちてきたような気がし、俺はそれらを感じながら小さく微笑んだ。そして、再び渡り廊下の先へと視線を向け、大きく頷いてから二人に声を掛けた。

「……よし、行こう、二人とも！」

「うん！」

「ああ！」

二人の力強い返事に後押しされるように、俺は二人と一緒にエネミーがいるとされるエリアへ向かって渡り廊下の上を歩いていった。途中、道が分かれているところがあつたが、鈴歌達とアイコンタクトでそこは一度スルーする事にし、俺達はそのまま進んでいった。そして、再び現れた扉をゆっくりと横に引き開けると、そこは少し狭い通路のような場所になっていた。

「通路……というよりは、ここも廊下かな？」

「みたいだね。えーと……あ、向こうの方に階段みたいなのが見えるよ」

鈴歌が指差す方に視線を向けると、そこには確かに階段らしき物が薄ぼんやりと見え

ていた。

「あ、本当だ。けど、こういう時って階段を上った先に何かある事が多いよな」

「この場合、何かというかはエネミーとの遭遇だろうけどね」

「そうだね。ふむ……それなら、先にこの階を探索してしまうのはどうだろうか。薄暗くて良くは見えないけど、反対側に大きな部屋があるようだから、もしかしたらあそこ
に何かエネミーの対策になる物があるかもしれないからね」

「エネミーの対策……そうですね、もしそういう物があれば、もちろん嬉しいですし。それ
れに、たとえそういう物が無くても、この校内の探索が進む分、得にはなりますからね」
「けど……何かの罠があるかもしれないし、慎重に調べてみた方が良さそうだね」

「だな。よし……それじゃあまずは、あの部屋に行ってみるか」

「うん」

「ああ」

そして、三人揃って息を潜めながら廊下を進み、件の部屋の前に立った瞬間、部屋の
上の方に差し込まれたプレートが目に入り、この部屋が何の部屋なのかが分かった。

「そっか……ここは柔剣道場だったのか」

「柔剣道場……って事は、柔剣道場自体は探せるところや隠れられるところは、かなり少
なそうだね。それに、昇降口が開かなかった事から考えると、外に逃げるのは無理そう

だから、逃げ込むのはあまり良くないかも……」

「そうだね。だけど、部室や更衣室などもあるだろうから、探してみる価値はありそうかな」

「部室と更衣室……そうですね、ロッカーや棚にこつそりと鍵が隠されている可能性もありますから、探してみるのもありかもしれませんね。でも、まずは——」

柔剣道場の引き戸に両手を付け、そのまま扉を開けようとしたが、どうやら鍵が掛かっているらしく、柔剣道場の引き戸はびくともしなかつた。

「……開かないか」

「つまり……今はあの階段を上がっていくしか無い、つて事だね」

「そうなるね。だが……こう薄暗いと探索どころか逃げるのですら困難だな。しばらくは携帯電話のライトでどうにかするしか無いが、そろそろ懐中電灯も欲しいところだね」

「ですね。懐中電灯は、職員室や宿直室にあるイメージが強いですし、後で探してみようか」

「ああ、そうしよう。さて……それでは二人とも、そろそろ階段を上がってみようか」

「はい」

揃って頷いた後、俺達は反対側にある階段へと向かい、この先にエネミーが待ってい

ることへの緊張から、早鐘のように心臓が鳴り始めるのを感じながら無言で階段を上
がった。そして、階段を上がり終え、大きな鉄の扉が視界に入った瞬間、その向こうか
ら強い威圧感のような物を感じ、思わずそれに気圧されそうになり、少しでも逃げ出
たいと思つてしまった。しかし、仲間を置いてここで逃げるわけにはいかない上、この
二人と必ず生きて帰ると約束したため、俺は自分の臆病な気持ちを押し殺しながら一度
深呼吸をした。そして、気持ちが落ち着いていた事を確認した後、俺は扉に軽く力を入れて、
そのまま横へ引き開けた。すると、まず視界に入ってきたのは、暗闇に包まれたとても
広い空間だった。

「暗いな……」

「うん。それにここ……私達が最初にいた場所と同じような雰囲気がある……」

「……という事は、ここは校内でドリーマーの力の影響が一番強い場所、になるのかもし
れないね……」

「ドリーマーの力の影響が、校内で一番強い場所……」

もし本当にそうだとすれば、ここは俺達にとつて一番危険な場所、という事になるが、
それだけここには何かしらの価値がある事にもなる。

「……よし、それじゃ早速——」

中へ入ろう、そう言おうとしたその時、パツパツという音を次々と上げながら中に

あつた照明が点きだし、突然訪れたその眩しさに俺達は目を瞑つた。そして、そろそろ良いかと思ひながら目を開けると、そこには――。

「フフフ……ようこそ、諸君。久しぶり……いや、さつきぶり……かな？」

この『深淵高校』を創り上げた謎の人物――ドリーマーとその隣で軽く俯きながら苦しそうな声を漏らしている異様な雰囲気をも漂わせた金色の仮面を被り金色のスーツを着た人物がいた。

「ドリーマー……!?!」

「貴方が何故ここに……!?!」

「ふっふっふ……なに、最初にここを訪れるのが本当に君達になるかを見に來ただけさ。

それと……彼――『傲慢』^{プライド}を紹介しようと思つてね」

「『傲慢』……?」

「ああ、そうさ。この見た目からも何となく察する事は出来ると思うが、彼はあまりに傲慢な男でねえ……その傲慢さから彼を慕う者はおろか、話し掛けようとする者すらろくにいないというとても寂しい奴なんだ。だから……このアトラクションにいる間、君達には彼の相手をしてほしいんだよ」

「コイツ――『傲慢』との命がけの鬼ごっここの相手をしろつて事か……」

「……簡単に言えばそうなるかな。もつとも、他の参加者達とは違つて君達はそう簡単

には捕まらなそうだけどねえ……」

「それはそうでしょう!?! 命がけの鬼ごっこで捕まるなんて絶対に嫌だから!!」

「ははっ、良いねえ……!?! その元気とやる気でこのゲームを、そして私をもっと盛り上げてくれたまえ!」

ドリーマーが楽しそうな笑い声を上げる中、アルヴィンさんはそれに動じる事なくドリーマーに話し掛けた。

「ドリーマー……貴方の目的は何なんですか? 私達の命を賭けたゲームを開催してまでする事は何なんですか?」

「アルヴィン君……それは最初のステージで訊く事じゃないよ。だから、それについては最後のステージまで君達が残っていたら話してあげるよ。『傲慢』や他のエネミー達から逃れ、最後のステージまで辿り着いたその時に、ね……」

ドリーマーは不敵な笑みを浮かべると、傍らにいる『傲慢』に声を掛けた。

「さあ……行きたまえ、『傲慢』。その己の傲慢さを悔いながら彼らの事を追い続けると良い!」

「ウ……グウウツ……!!」

『傲慢』は苦しそうな呻き声を上げると、ヨロヨロとした動きで進み出し、それを見た俺達は頷いてから来た道を急いで戻り始めた。背後から聞こえる『傲慢』の苦しそうな呻

き声に耳を塞ぎたくなったが、それを我慢しながら俺は鈴歌達と一緒に踏み外さないように、そして急いで階段を降り、そのまま渡り廊下へと向かった。そして、渡り廊下を戻っている最中、先頭を走っている鈴歌がチラツと背後を振り返ってから俺達に話し掛けてきた。

「……ねえ、あの『傲慢』っていうエネミー……結構足が遅いみたいだよ……?」

「はあ、はあ……確かに今はそう見えるけど、後から速くなる奴かもしれないし、油断はしない方が良くぞ……?」

「……そう、だね……。だから……油断は禁物だ、よ……」

真ん中を走るアルヴィンさんが、少し苦しそうに息を切らしながら言うと、鈴歌はそれに対して無言で素直に頷いた。そして、再び教室棟へ戻ってきたその時、「グウ……グオオーツ!!」という雄叫びが聞こえ、俺達は弾かれたように背後を振り返った。すると、予想していた通り、『傲慢』がさつきまでとは比べ物にならない速さで走ってくるのが見え、その異様さに今までに感じた事が無い程の恐怖を感じた。

「……ちっ、やっぱりか……! 鈴歌とアルヴィンさんは、そのまま階段を上がっていった下さい! 俺はアイツをこの1階に引きつけておくので!」

「う……うん、分かった!」

「……仕方ないか。だが……暖士君、絶対に逃げ切ってくれよ?」

「はい、もちろんです！ 二人とも、また後で！」

俺の言葉に頷くと、鈴歌達はそのまま上がっていき、それを見ながら俺は少しだけスピードを緩めた。そして、『傲慢』の狙いが俺に定まった事を感じた後、再び速さを上げながら背後を振り返った状態で1階を走り出し、そのまま『傲慢』が階段を通り過ぎたのを確認してから顔を前へと戻した。ゾンビとも獣ともとれるような声を上げながら俺を捕まえるために走ってくる『傲慢』の不気味さは、俺の心に少なからずダメージを与え続けていた。しかし、この命がけの鬼ごっこを制し、鈴歌達と再会を果たすために俺はひたすら走り続けた。生き抜くため、そして約束を果たすためにただ走り続けた。

……確か、この辺に2階に行くための階段があつたはずだ。上がった先に鈴歌達や他の参加者達がいたら悲惨だけど、今はそんな事を言ってる場合でも無いな……！

走り続けている事で生じている息苦しさと息切れ、そして鼻の奥がツーンとしてくる感覚に耐え、酸欠による頭がボーツとしてくる中でそう考えた後、俺は目の端に見えた階段に向かって曲線を描くように曲がり、そのまま階段を上がっていった。足で階段をしつかりと踏みしめ、時には一段飛ばしをしながら上がっていき、俺が最初にいた2階へ戻ってきた後、下の方から聞こえる『傲慢』の声と階段を上がってくる大きな音を聞きながら今度は反対側へ向かって走り出した。そして、走りながらどこかの教室が開いていないか軽く確認していたその時、偶然扉が開いた教室があり、そこへ飛び込む形で

俺は教室内に入った。その後、音を出る限り立てないようにしながらすぐに扉を閉め、『傲慢』が来ない内に掃除用具入れの中に隠れた。すると、それからすぐに廊下の方から『傲慢』の足音が聞こえたかと思うと、荒い息づかいが続いて聞こえ、俺はバレないように息を潜めた。そして、そのままゆつくりと廊下を歩いていく足音が聞こえた瞬間、安心感からホッと胸を撫で下ろした。

良かった………どうにか逃げ切れたみたいだ。

逃げていた時はあまり感じなかった疲労感と体の怠さに耐えながら掃除用具入れを出たその時、教卓の方から突然ガタツという音が聞こえ、俺は教卓に隠れている奴への警戒心を高めた。

エネミー………ではないだろうけど、少なくとも鈴歌達でも無いはず。という事は、あそこにいるのは他の参加者達になるけど、何が起きても良いように警戒だけはしておいた方が良さそうだな………。

そして、足音を立てないようにしながら教卓へと近づき、ある程度の距離を保つたところで足を止めた後、教卓に向かって声を掛けた。

「………そこにいるのが誰かは知らないけど、少なくとも俺はエネミーじゃない。だから、大人しく出てきてくれないか？」

すると、「う、うん………」という不安そうな声で答え、教卓の下に隠れていた人物がゆっ

くりと姿を現すと、俺は思わず驚きの声を上げてしまった。

「お、王賀さん……?」

「う……うん、そうだよ……」

セーラー服姿の茶色のセミロングヘアの女子——王賀さんは目を潤ませながら答えると、本当にエネミーがいなかった事の安心感からかその場にへたり込んだ。

「うう……本当に怖かったあ……。いきなり、こんな暗いところに一人にされちゃうし、エネミーとか出口とか意味分からない事を言われるし……真央、本当に不安だったよお……」

「……大丈夫だよ、王賀さん。エネミーはさつき通り過ぎて行ったから、しばらくは来な
らな
いよ」

「ほ、本当……?」

「ほんと、ほんと。だから、安心してくれて構わ——」

その瞬間、王賀さんはスツと立ち上がると、嬉しそうな笑みを浮かべながら俺に抱き付いてきた。

「え……ちよ、王賀さん……!?!」

「……ゴメンね。でも、今だけはこうさせて欲しいの……。それだけ、真央は怖かったか
ら……」

「……はあ、分かりました」

暗がりでも女子に抱き付かれるという思春期の男子なら心から望むであろうこの状況に対して俺は何も思う事は無かった。それは決して俺が女子からのこういつた行動に慣れてるからなどでは無く、こんなよく分からないところでそんな思いを抱く方がおかしいと思っているからだ。

まあ……王賀さんみたいなタイプに興味が無いからとも言えるけど、このまま突き放していくわけにも行かないし、とりあえず落ち着いてもらえるまで待つとするか。

今の状況に対して諦めの思いを抱いた後、俺は胸の中で泣き続ける王賀さんの事をただ待ち続けた。そして、それから一分足らずで王賀さんは泣き止むと、少し恥じらいの色を浮かべたような表情で俺の事を見上げた。

「えへへ……本当にゴメンね、いきなり泣き出しちゃって……」

「別に良いですよ、それくらい。それより……王賀さんは、いつからあそこに隠れていたんですか?」

「真央、で良いよ、暖士君。えつとね……私は最初に3階で目が覚めたんだけど、この暗さだから本当にゆっくり進んできたの。そしたら、九鬼さんと偶然会ったから、軽く真央達の状況を確認してたの」

「そっか、九鬼さんも無事だったんだ……。それで、九鬼さんはどこに?」

「今はこの校内のどこかにいると思うけど、よく分からないの……。私と一緒に探索をしてくれてただけど、ここが開いてる事に気付いたら、自分は探索を続けるから真央はここに隠れてて良いよって言うてくれたから、とりあえずその言葉に甘えてさっきまで隠れてただ……。――」

「なるほど……。となると、九鬼さんはエネミーが校内を徘徊してる事を知らないわけか。おう――じゃなかった、真央は携帯が一部の機能だけ使える事って知ってるか？」

「え、そうなの……？」

「ああ、電話とメールとブラウザだけだけだな。それに、ブラウザは一定のページしか見れないけどさ。」

「そっか……。それじゃあ暖士君、真央と連絡先の交換……。してくれる？」

「ああ、それは別に良いぜ？ 探索を続ける上でお互いの情報を交換するのは、絶対に必要なことだからな」

「わあっ……。ありがとう、暖士君っ！ 真央、九鬼さんや暖士君みたいな優しい人に出会えて本当に嬉しいよ……。――」

そう言いながら本当に嬉しそうに笑って顔を近付けてくる真央の様子に、少しだけ苦手意識が芽生えたが、それを顔に出さないようにしながらポケットから携帯を取り出した。

「……それじゃあ交換しようか?」

「うんっ!」

そして、連絡先の交換を終えた後、俺は真央がこれからどうするのか気がなり、ニコニコとしながら携帯の画面を眺める真央に話し掛けた。

「それで、この後はどうするんだ? 九鬼さんを待つなら、車で一緒にいても良いけど

……」

「ううん、真央もここからは探索に参加するよ。このまま九鬼さんや暖士君に任せつきりしても良くないし、勇気も貰えたから大丈夫だよ!」

「そっか……それなら、俺達と一緒に来るか? 今、鈴歌とアルヴィンさんと待ち合わせをしてるから、探索をするなら一緒の方が——」

「それも大丈夫。確かに人の数が多い方が安心するけど、あまり多くても追いかけられた時に大変でしょ? だから、真央は一人で頑張ってみるよ」

「……分かった。それじゃあこれを持っていくと良いよ」

そう言いながら自分用として持っていた地図を渡すと、真央は不思議そうな表情を浮かべた。

「これって……地図?」

「ああ、職員室にあったこの『深淵高校』の地図だ。元々、俺の分として持っていた物だ

けど、人数分は用意してあるだろうし、これからまた職員室に行く予定だったから、それはやるよ」

「暖士君……うん、ありがとう！　暖士君に会えたのは、真央的に本当に幸運だったよ！」

「良かったな。さてと……それじゃあ俺も行くよ」

「うん！　暖士君、またね！」

「ああ、またな」

そして、真央が教室を出ていった瞬間、俺はさつきよりも強い疲労感に襲われ、近くにあった椅子にそのまま腰掛けた。

「……はあ、疲れたあ……。俺、ああいうタイプの奴と話すところなんにも疲れなんだな……」

数的には男友達の方が多いが、クラスや学年の中には女友達ももちろんいる。しかし、真央のようなタイプの女子は、今までにいなかったためか、真央との会話を終えた今、ようやく終わったかと思つて少し安心していた。

本当はこういう事を思つちやいけないだろうし、真央みたいなタイプが好みの奴もいるんだろうけど、どちらかと言えば鈴歌みたいな奴と話してる方が俺的には気が楽なんだよな……。

そんな事を考えながらブーツと天井を眺めていたその時、突然携帯がブルブルと震えだし、その震動と音で俺はハツとした。

危ない危ない……こんな所でブーツとしてるなんて自殺行為も良い所だからな。

そう思いながら気持ちを切り替えた後、携帯の画面を確認すると、画面には一通のメールが届いた事を示す表示が出ていた。そして、メールを確認してみると、差出人は鈴歌だった上、俺と別れた後にアルヴィンさんと一緒に無事に逃げ切った事や約束通り職員室で待っている事が書かれていた。

「……良かった」

その言葉は、俺の口から自然に漏れていた。言うならば、さつき真央に言ったような形式的な物ではなく、俺の中からふつと出てきた心からの言葉だった。

……本当に不思議だな。ついさつきまで名前も知らなかったはずなのに、この少しの時間でここまで大事な存在になるなんて……。

二人の顔を思い浮かべながらそう思い、小さくクスリと笑った後、「……よし」と言いながらゆつくりと椅子から立ち上がった。

「さて……それじゃあそろそろ二人の所に——と、その前に返事だけでも送っておくか」携帯を操作して鈴歌からのメールに返信をした後、俺は携帯をポケットにしまい、二人が待つ職員室に向かって静かに歩き始めた。

第5話 再会と再開

隠れていた教室を出た後、ふと上に視線を向けると、『2—2』と書かれた白いプレートが差し込まれているのが見えた。

「へえ……ここは2—2だったのか」

さつき真央に地図をあげたから手元には無いけど、後で2—2についての情報は書いといた方が良くもされないな。

そんな事を考えながらさつき上がってきた方の階段へ向かって歩き、エネミーの気配に気をつけながら静かに1階へ降りた。そして、道中で他に開きそうな部屋を探したり、エネミーの足音などに気をつけたりしながら職員室に向かい、目の前に職員室が見えてきたその時、職員室のドアがガラガラツという音を立てて開いたかと思うと、中から同じ参加者の一人である九鬼拓門くきたくとさんが出てきた。

そっか……九鬼さんもまだ無事だったのか。となると、後は丑三さんだけがまだ無事かわからない事になるけど……一体どこにいるんだ？

一度すれ違つて以降、まだ出会っていない人物——丑三うしみつと宗むねさんの事を思い出しながら小首を傾げていたその時、九鬼さんが不意に俺の方へ顔を向けた。そして、暗い中に

誰かがいる事で一瞬怯んだ様子を見せたものの、それが俺だと気付いた瞬間に顔をぱあつと輝かせた。

「暖士君！ 本当に無事だったんだね！」

「ええ、何とか。ところで……九鬼さんはどうしてここに？」

「ああ、それはね——」

九鬼さんが説明をしてくれようとしたその時、職員室の中から鈴歌とアルヴィンさんが顔を出し、俺の顔を見た瞬間、九鬼さんと同じようにとても嬉しそうな表情を浮かべた。

「暖士……！ 本当にアイツから逃げ切れたんだね……！」

「ああ、本当にギリギリだったけどな」

「ギリギリだったとしても逃げ切れた事実は変わらないよ。暖士君……君にまた会えて嬉しいよ」

「はい、俺もです」

鈴歌とアルヴィンさんにまた会えた嬉しさから、俺の顔は自然に微笑みを浮かべていた。そして、また話を始めようとしたその時、俺達の会話を静かに聞いていた九鬼さんが、ハツとした表情を浮かべた後に周囲を注意深く見回した。

「……よし、エネミーらしい何かはないな……。えつと……皆さん、とりあえず職員室

に入りませんか？ このまま廊下にはそのエネミーに襲われかねませんから」

「そうですね。鈴歌とアルヴィンさんはもちろん、九鬼さんにも訊きたい事はありますから」

「僕に訊きたい事……それが何かは分からないけど、僕に答えられる事なら何でも答えるよ」

「ありがとうございます。それじゃ早速職員室に入りましょうか」

「うん！」

「ああ」

鈴歌達と職員室に入った後、静かにドアを閉めてからそれぞれ近くにあった座席につき、少し気持ちが落ち着いていたのを感じた後に話を始めた。

「さて……まずは何から話したら良いですかね？」

「そうだね……それなら、私達と別れた後に暖士君がどのようにエネミーから逃げ切ったのかを聞きたいかな？」

「エネミーから逃げ切った時の事……ですか？」

「ああ。今のところ、しっかりとエネミーから逃げ切ったのは、暖士君だけだからね。だから、その時の話からエネミー——『傲慢』^{プライド}についての対策を立てておきたいんだ」

「……分かりました」

頷きながら答えた後、俺はさつきあつた出来事について話をした。そして、話を終えた瞬間、九鬼さんはとても安心した様子で小さく息をついた。

「そっか……彼女——真央さんも無事だっただね。探索のためだったとはいえ、あの教室にずっといさせていたのは心配だったから、本当にホツとしたよ」

「まあそれでも、早く合流してあげた方が良いかもしれませんがね。元気はあるようでしたけど、怖がつてはいましたから、エネミーに追いかけられた時にパニックを起す可能性はありますし」

「うん、そうだね。携帯が使える事が分かった以上、早めに合流してお互いに連絡を取り合えるようにした方が、この探索も有利に進められるからね」

そう答える九鬼さんの表情は、最初に見たような弱気そうな感じとは違い、このゲームにすっかりと向き合おうとしている事が見て取れる程、勇気などに満ちている物だった。そして、その様子から九鬼さんに対しての印象を少し変えた後、俺はとある事を思い出し、それについて九鬼さんに問い掛けた。

「ところで……さつきも訊こうとした事なんですけど、九鬼さんはどうして鈴歌達と一緒にいたんですか？」

「ああ、それなただけだね……実は、真央さんと別れて探索をしていた時、偶然二人と出会ったんだよ。それで、二人の表情がスゴく真剣で焦っているように見えたから、とり

あえず話を聞いたなら、エネミーから追われていた事や君がエネミーを引きつけている事などが分かってね。だから、ここは一度この二人と一緒に君達の待ち合わせ場所であるこの職員室に来た方が安全だし、色々な情報交換も出来ると思って、こうして一緒に職員室に来たんだよ」

「そうだったんですね……鈴歌からのメールには、それについては何も書かれてなかったから、本当に驚きましたよ」

「あはは……ゴメンね、暖士。私達もあの時はエネミーに対しての警戒を優先にしてたから、まずは私達が無事な事を伝えなきゃって思って、結果としてそれしか伝えてなかったんだよね」

「なるほど……まあ、その気持ちは分かるから、別に良いよ。それより……一つ気になる事があるんですけど……」

「気になる事……?」

「はい。えつと……この中で、丑三さんの姿を見掛けた人っていますか？　鈴歌の場合、俺と一緒に2階で見掛けた以降って事になるけど……」

しかし、皆はうーんと唸ったり首を横に振ったりするばかりで、その問いに答えられた人は、結局一人もいなかった。

やっぱりか……となると、丑三さんだけ消息が分からない事になるけど、本当に丑三

さんはどこに行っただ……？

顎に軽く手を当てながらそんな事を考えていると、鈴歌達は次第に心配そうな表情を浮かべ始めた。

「あの人……スゴく嫌な感じだし、本当なら会いたくはないけど、一人だけどこにいるか分からないとなると、少し心配になるかも……」

「確かにそうだね……物語なんかだと、こういう時に消息が知れない人は、黒幕の仲間だったり追いかけてくる敵の正体だったりするが……」

「あの人に限っては、それだけは本当に無いでしょうね。ただ……鈴歌さんの言う通り、やっぱり一人だけ見つからないというのは、少し心配になりますから、探索の際は丑三さんの事も捜してみる事にしましょうか」

「そうですね。いくら嫌な人でも一応は同じ参加者ですし、捜すのが遅れて見つけた頃には冷たくなっていた、なんて事になるのもなんか嫌ですから」

「確かにね。それじゃあこれからの探索中は、ここから出るための出口とそれを開けるための鍵、後は丑三さんを探す事にした方が良さそうだね。もちろん、エネミーには気をつけながらだけど」

「だな。あ、そういうえば……この職員室に懐中電灯つてあったか？」

「ううん……残念だけど無かったよ。だから、またしばらくは携帯のライトで照らして

いく事になりそうかな」

「そつか……まあ、それならしようがないか」

懐中電灯があれば、もう少し探索の幅を広げられそうだけど、無いというならしようがないからな。ただ……もし、本当に暗くて何も見えない部屋があつたら、今のところは一度出直す事になるけど。

鈴歌達からの情報を元にしながらこれからの探索の事について考えていたその時、九鬼さんが「さて……」と言いながら入り口の方へと静かに歩き、ドアに手を掛けた後に振り返りながら声を掛けてきた。

「それじゃあ私もそろそろ探索を再開しますね。先程、鈴歌さん達から地図も頂きましたから、さつきよりは色々な場所に行く事が出来そうですから」

「分かりました。けど、無理はしないで下さいね?」

「うん、それはもちろんだよ。皆さんもこの先の探索は、気をつけて行って下さいね」

「はい、ありがとうございます。九鬼さんもお気を付けて」

「うん、ありがとう。それじゃあ行つてきます」

ニコリと微笑みながら言った後、九鬼さんはドアを静かに開けて外へ出ると、そのままドアを静かに閉めた。そして、遠ざかっていく九鬼さんの足音を聞きながらここからの探索に向けてやる気を高めた後、俺はとある事について鈴歌に問い掛けた。

「鈴歌、もしかして九鬼さんには『ドリームアイランド』について話してないのか？」
「あ、うん……特に話す事でも無いかなと思つたから話してないけど、どうして？」

「いや、さつき探索中にやるべき事を上げていた時に、『ドリームアイランド』や俺達の共通点について何も言つてなかつたからもしかしたらと思つてな」

「なるほどね。でも……やつぱり話しておいた方が良かったのかな？」

「うーん……何とも言えないな。話す分には構わないと思うけど、まだ証拠が少ない中でこの事を話しても逆に混乱させるだけな気もするし、ブラウザが使える事が分かつた以上、九鬼さんも何かのきっかけであのページは見るだろうから、次に九鬼さんにあつた時にそれとなく訊いてみるだけで良いんじゃないかな？ 俺も真央にはブラウザが使える事は話したけど、『ドリームアイランド』については何も話してないからさ」

「そっか。それじゃあそうする事にしようかな」

「うん」

鈴歌の言葉に対して頷きながら答えていた時、鈴歌は突然「あ、そうだ」と何かを思い出した様子で声を上げると、職員室の中をスイスイと進み、とある机の前で足を止めて何かを手にとつた。そして、そのまま戻つてくると、手に持っていた物——『深淵高校の地図』を俺に手渡した。

「はい、地図。さつき、持つてた分を王賀さんにあげちゃつたつて言つてたから、代わり

の分。因みに、丑三さんの分も後で渡すために持つてるから、それは安心して良いよ」
「うん、ありがとう、鈴歌」

お礼を言ってから鈴歌から手渡された地図を制服のポケットにしまっていると、鈴歌が興味津々な様子で話し掛けてきた。

「ところで、王賀さんってどんな子だったの？ 少しだけでも話はしたんでしょ？」

「ああ、話した事は話したけど……俺的にはちよつと苦手かもしれないな」

「苦手って……暖士がそう言うって事は、あまり良い感じの子じゃなかったって事？」

「うーん……明るい奴なのは確かだし、男子からの人気は高そうな奴なんだけど、今までああいうタイプの奴が友達にいなかったからなのか、話してると結構疲れるんだよね……」

「へえ……それはなんか意外かな。暖士って友達が多いイメージだから、色々な人と話した事があるのかと思ってたよ」

「いや、友達が多い方だと思っし、女友達もいる事はいるけど、やっぱり男友達の方が多
いかな。女友達とも軽く話す事はあるけど、男友達ほど色々な事を話すわけでもないか
らさ」

「なるほどね。まあ、私も男友達がいる事はいるけど、どちらかと言ったら女友達の方が
多いかな」

「なるほどな。ところで……アルヴィンさんは、男友達と女友達はどっちの方が多いですか？」

「うーん……半々といったところかな。ただ、友達と言っても同い年か年上しかいなかったから、年下の人とこんな色々な話をする機会は、あまり無かったかな」

「え、そうなんですか？」

「ああ、もちろん仕事場の後輩はいるけど、後輩達は後輩達で話している事が多かったから、仕事の話以外の話題で話す事はあまり無かったよ」

「へー……それはなんだか意外です」

「最初にあの場所に集められた時、私達の会話に自然に入ってきていたので、てつきり年下の人と話すのも慣れてるのかなと思ってましたから」

「ははっ、なるほど。でも、だからこそ今みたいに君達と色々な事を話せているのは、私にとつてとても貴重な体験になっているし、こうして君達と出会えた事は幸運だと思っているよ」

そう微笑みを浮かべながら言うアルヴィンさんの表情からは、嘘などはまったく感じられず心からそう思ってくれているのがしつかりと感じられた。そして、それに対して俺と鈴歌が揃って微笑み返していると、アルヴィンさんはチラリと入り口の方に視線を向けた後、コクリと頷きながら静かに口を開いた。

「さて……それでは、私達もそろそろ探索を再開しようか。ただ、新しい鍵などはまだ見つかっていないから、しばらくは開いている部屋が無いかを探るのがメインになるだろうけどね」

「そうですね。後は……やっぱり懐中電灯が欲しいので、地図を参考にして他にありそうな場所も探してみましようか」

「それと……私達が集められた理由のヒントと丑三さんもだね。こうやって上げてみると、結構な数があるけど、私達ならきつと大丈夫だよね」

「ああ、もちろんだ」

鈴歌に対して頷きながら答えた後、俺は職員室のドアを軽く開けてエネミーの気配がないかを探った。そして、エネミーが近くにいなそうだと感じた後、鈴歌達の方へゆっくりと振り返り、コクンと頷いてから声を掛けた。

「さあ、行こう。このゲームをクリアして皆で生きて帰るために」

「うんー！」

「ああ」

その返事を聞いた後、俺達は再び探索をするために職員室を後にした。

第6話 恐怖の涙と蘇る記憶

職員室を出て渡り廊下とは逆の方へ向かって廊下を歩いていたら、隣を歩いているアルヴィンさんが、ふと何かを思い出した様子で「……あ、そういえば」と声を上げた事で、俺達は同時にその場で立ち止まった。

「アルヴィンさん、どうしたんですか？」

「ブラウザを開いた時に見える事が出来る『ドリームアイランド』のサイトの事で、少し気になる点があつてね」

「気になる点……ですか？」

「ああ。職員室で掛かってきたドリーマーからの電話の中で、『ドリームアイランド』が閉園した事やそれらについての情報がサイト内に書かれていると、彼は言っていただろう？ だから、何か他にも隠されているような気がするから、後で落ち着いた時にでももう一度サイトを見てみようと思つてね」

「……そうですね。サイト内にある情報から、俺達の共通点を新しく導き出せる可能性も充分にありますし、もう少し探索を進めてこの『深淵高校』のどこかにあるかもしれないヒントも手に入れた頃にでも、あのサイトをまた見てみる必要はありそうですね」

「うん、それに『ドリームアイランド』は私達の記憶の中にある物の中で、今のところ唯一共通してる物だもんね。だから、私達が忘れてるだけで、たぶん『ドリームアイランド』には私達三人が繋がる何かがあるんだよ」

「ああ、そうだな。それに、他の二人と丑三さんにはまだ『ドリームアイランド』については訊いてないけど、ドリーマーが電話の中で、俺達が考えていた六人の共通点が『半分は合っている』と言っていたから、10年前に行つた事が無かつたとしても、少なくともあの三人も『ドリームアイランド』に何らかの関係があるのは間違いないはずだ」

「ああ。だから、さつき職員室内で話したように、次に会つた時にでもそれとなく訊いてみるのが良いだろう。もし、本当に『ドリームアイランド』と彼らとの間にも何らかの関係があるのならば、ゲームの直接的な攻略には繋がらなくとも何かしらの謎を解く手掛かりくらいにはなるかもしれないからね」

「はい。となると……そういう物が隠されていてもおかしくは無さそうな図書室や資料室も探索する時には念入りに見てみた方が良さそうですね」

「ああ、そうするとしよう。さて……歩みを止めてしまつてすまなかつたね。そろそろまた歩き出すとしよう」

「はい」

そして、再び歩き出してから数分後、地図に目を向けていた鈴歌から「うーん……」と

いった声が聞こえた。

「鈴歌、どうした？」

「あ……えつとね、この教室棟に図書室とか資料室が無いかなと思つて地図を見てたんだけど、資料室はこの1階にあるみたい。ただ、図書室はこの教室棟の端にある通路から行ける特別教室棟にしか無いみたいなんだよね」

「どれどれ……あ、本当だ。地図を見る限り、階段の手前にある通路から行くみたいだな」

「ふむ……となると、先に資料室から調べた方が良さそうだね」

「ですね。えーと、資料室は——あ、ここか」

視線を横に向けると、上の方に『資料室』と書かれているプレートが差し込まれた部屋があり、俺は引き戸の取っ手に手を掛けて軽く力を加えた。すると、引き戸はいつも簡単に開いたため、俺達は『傲慢』^{プライド}の気配に気をつけながら資料室の中へと入った。資料室の中は、様々は資料が収まった本棚や書き物をするためと思われる机があり、少し警戒をしながら近付いてみると、机の上には万年筆とメモ帳や懐中電灯のような物が置いてあった。

「ペンとメモ帳……それに懐中電灯か」

「懐中電灯は……うう、電池切れかあ……」

「となると、どこかで電池を見つけないといけないね。職員室の中は、暖士君が来る前に九鬼さんも交えて軽く探索を試みたが、それらしい物や他の鍵などは無かったから、また別の場所にあるのだろう」

「ですね。そして、後はこの万年筆とメモ帳ですけど……」

俺は視線を移しながら携帯のライトで万年筆とメモ帳を照らした。万年筆はこれといって特別そうな物では無かったが、何となくとても使い込まれた一品のような感じがし、メモ帳には恐らく万年筆を使って書かれたと思われる日本語の文章が何ページにも渡って記されていた。

「日本語のメモ……でも、一体誰が……？」

「それは分からないけど……とりあえず読んでみれば分かるんじゃないかな？」

「そうだな」

鈴歌の言葉に答えた後、俺は書かれていたメモの内容を読み上げた。

『『ドリームアイランド』、あの夢の場所が閉園を迎えてからそろそろ半年が過ぎようとしている。あの場所は、様々な人々の心に楽しさや喜び、幸せなどをもたらしていたと今でも思っており、私自身もあの場所での思い出が心に強く残っている一人だ。少しだけ日常の退屈さを感じていた私に、ある出合いを与えてくれた上、これからの毎日生きる上での希望や目標が出来るきっかけとなったあの場所は、私にとって掛け替えのな

い大事な場所だ。

だからこそ、私は絶対に許すことは出来ない。様々な人々の夢を終わらせたあの忌々しい奴らの事を。たとえ、私が悪魔に魂を売る事になっても将来何かしらの形で奴らには自身の罪を思い知ってもらう事になるだろう。これは『ドリームアイランド』の関係者だからというわけではなく、私自身が行いたくて行う孤独な復讐。そう、夢を与える側になるはずだった私が、悪夢を与える側として行う一人だけの復讐なのだ』……」

「……」このメモを書いた人は、本当に『ドリームアイランド』が好きだったんだね」

「ああ。わざわざ『掛け替えのない大事な場所』と書いている事を考えると、このメモを書いた人物にとっては、『ドリームアイランド』は本当に夢の場所だったのかもしれないね」

「そうですね。でも……後半部分の内容は、結構内容が暗い感じですよ。復讐だとか罪を思い知ってもらうだとか書いてますし……」

「夢を与える側になるはずだった私が、悪夢を与える側として行う一人だけの復讐……その前の方に『ドリームアイランド』の関係者だからというわけではなくって書いてある事も考えると、このメモを書いた人は少なからず『ドリームアイランド』の運営に携わっていた人か当時のスタッフって事になるよね？」

「ああ……そして、職員室でドリーマーから掛かってきた電話の内容や『ドリームアイラ

ンド』への反応も考えるならこのメモを書いたのは、ドリーマーなんだろう」

「ドリーマーと名乗っている辺り、暖士君の言う通りなのだろうね。ただ……このメモに書いてある出会いや奴らと呼ばれている人達の事は、まだ分かりそうもないかな」

「そうですね。けど、このメモは大事な物だと思いますし、まだページも残っているみたいですから、このまま万年筆と懐中電灯と一緒に持つていってみましょうか」

「それが良いだろうね。さて……次は、この本棚を調べたいところだが……」

アルヴィンさんが言うのに合わせて本棚に視線を戻しながら万年筆などをポケットにしまった後、本棚に収められている本や資料の数に俺達は小さく溜息をついた。

「……やっぱり多いですよね、これ……」

「うーん……これ、手分けをしても流石に全部は調べられないよね……」

「……まあ、軽く捲る程度に留める形でも良いから、とりあえず調べてみるしか無いだろうね。だが、いつ『傲慢』が来ても良いように廊下からの物音にも気をつける事にしよう。調べ物に集中していて気付いた時には背後に立っていた、なんていう事態は避けたいからね」

「そうですね。それじゃあ——」

調べ始めましょう、と言おうとしたその時、廊下の方からハアハアという息苦しそうな息遣いが聞こえ、俺達の間に緊張が走った。

今の声……間違いない、『傲慢』だ……！

その瞬間、『傲慢』に追いかけられていた時の記憶が蘇り、心臓が早鐘のように鳴り出したが、一度『傲慢』から逃げ切ったという事実を思い出しながら右手を心臓の辺りにあてた事で、心臓の鼓動は少しずつ静まっていった。

ふう……：……どうにか落ち着いたな。けど、どうする……『傲慢』から逃げるためにこの部屋から出るのは、流石にリスクが高い。かと言って、このままこの部屋でアイツが通り過ぎるのを息を潜めながら待つというの……。

徐々に近付いてくる『傲慢』の息遣いを聞きながらどうしたら良いか考えていたその時、不意に俺の左手が何かに握られ、俺はそれに驚きながらも声を上げずに視線だけをそちらに向けた。すると、視界に入ってきたのはじんわりと汗が滲んだ鈴歌の右手と恐怖の色が浮かんだ鈴歌の怯えた顔だった。

……：……そうだ、俺が迷っていたってしょうがない。今の俺に出来るのは、このチームのリーダーとして鈴歌とアルヴィンさんの安全を考えながらこの状況をどうにかする事なんだ。だから、いざとなったらあの時みたいに俺が囿になるとして、今は最善の手段を取るしか無い……！

すぐ近くから聞こえてくる鈴歌とアルヴィンさんの緊張した息遣いと心臓の鼓動、そして左手に伝わってくる鈴歌の体温と汗を感じながら覚悟を決めた後、鈴歌の右手を強

く握り小声でアルヴィンに話し掛けた。

「……アルヴィンさん、こつちまで来てもらえますか？」

「暖士君……一体何を……？」

「説明は後でします。だから……お願いします」

「……分かった」

アルヴィンさんの答えに頷いた後、「それじゃあこつちに……！」と言いながら鈴歌の手を引いて資料室の隅へと向かった。そして、ちようど隠れられそうな暗がりに見つけた後、そこに鈴歌を隠すような形で立つと、鈴歌は不安そうな声で話し掛けてきた。

「だ、暖士……」

「……大丈夫だ。お前の事はもちろん、アルヴィンさんの事も絶対に守ってみせる。だから、今はそのまま息を潜めて待っててくれ」

「う、うん……分かった……」

未だ不安そうな表情を浮かべる鈴歌の頭を右手で軽く撫でた後、緊張した面持ちで隣に立っているアルヴィンさんに声を掛けた。

「アルヴィンさん、いざとなったら鈴歌をお願いします。アイツがもし入ってきてても、本棚を倒すなりして一度アイツの動きを封じる事は出来そうなので、俺が引きつけている間に二人でそのまま逃げて下さい」

「……分かった。けど、その時は絶対に逃げ切ってくれよう。」

「……もちろんです」

アルヴィンさんとの小声での会話を終えた瞬間、突然「ウ……ウウ……!!」という『傲慢』の苦しそうな声が聞こえ、俺達は暗がりの中から一齐に資料室のドアの方へ視線を向けた。そして、いつ『傲慢』が入って来ても良いように心の準備をしながら廊下の物音に耳を澄ませていると、『傲慢』は「ウウ……グウツ、ガアーツ……!!」という咆哮のような唸り声を上げ、その音の波動で廊下の窓がガタガタツとまるで悲鳴を上げるように鳴り出した。『傲慢』の唸り声と窓の振動音、その二つが合わさる事で生まれた不快な音に耳を塞ぎたかったが、耳を塞いでしまつては『傲慢』が入ってきた時にすぐに行動をする事が出来ないため、俺は顔を顰めながらそれを必死に耐えた。それから数分もの間、『傲慢』は唸り声を上げ続けていたが、その声は突然ピタリと止み、その事について不思議に思っていると、再び「ウウ……」という声を上げながらゆつくりと歩出す足音が聞こえた。そして、そのまま『傲慢』が歩き去っていくまで待った後、気配がしない事を確認してから俺は安心感から大きく息を吐き、「鈴歌、もう大丈夫だからな」と言いながら鈴歌の方へ向いた瞬間、涙で目を潤ませた鈴歌の顔が目に入ってきた。

「鈴歌……」

「い、ゴメンね……でも、やっぱりちょっと……こわ、くて……」

「……ああ、分かつてる」

語りかけるような声で答えながら握っていた手を離し、鈴歌を落ち着かせるために軽く抱き締めるような形を取った後、そのままの声で話し掛けた。

「こんなところであんなのに殺されるかもって思ったら、怖いのは当然だ。だから、怖いと思つた時は今みたいに正直に言つて良いし、泣きたい時は本当に泣いても良いからな」

「うん……うん……！」

涙交じりで答える鈴歌の声に軽く頷き、鈴歌から聞こえ始めた嗚咽を聞きながら俺は背中を静かにポンポンと叩いた。形としては、真央の時と同じなのかもしれないが、今だけはあの時とは違つて鈴歌を落ち着かせてやらないといけないという思いが俺の中には確かにあつた。

でも、本当に不思議だな……真央の時は困惑とか苦手意識とかがあつたのに鈴歌に限つてはそれが無いし、ちゃんと守つてやらないといけないという思いで満ち溢れているなんて……。

その二人に対して感じている思いや気持ちの差が不思議ではあつたが、鈴歌から感じる穏やかな体温と心の奥から感じるポカポカとした暖かさの二つが、今の俺にはとても心地良く、それと同時に鈴歌の事は絶対に守らないといけないという強い思いが俺の中

に沸き起こってきていた。そして、しばらくそうしている内に鈴歌から聞こえていた嗚咽の音が止み、俺がスツと鈴歌から離れると、鈴歌は目を赤くしながらも少し気恥ずかしそうに小さな笑みを浮かべていた。

「えへへ……なんだか恥ずかしいところを見せちゃったね。でも、暖士がああしてくれただおかげでスゴく安心したよ。ありがとうね、暖士」

「どういたしまして。でも、もう大丈夫なのか？」

「うん、それはバツチリだよ。だから、暖士に助けてもらった分、今度は私が頼りにされるように精一杯頑張るね」

「ああ、よろしくな、鈴歌」

「うんー」

満面の笑みを浮かべる鈴歌の様子に強い安心感を覚えていたその時、突然アルヴェインさんがクスクスと笑い始めた。

「やはり、二人の姿はとても絵になるね。涙を浮かべる鈴歌さんを優しく語りかけ、泣いている鈴歌さんの事を軽く抱き締めながら静かに背中を叩く暖士君……うん、ここに絵筆とキャンバスがあつて、こんな状況では無かつたら、本当に絵を描きたいところだったよ」

「……アルヴェインさん、それは勘弁して下さい……」

「そ、そうですよ……!」

「ははっ、それは残念だ。けど、さっきの姿から二人がお似合いの男女だとは思つたよ」
「お、お似合いって……」

「ふふ、それにさっきの行動だつて二人がお互いの事を信頼しているから、取つた行動だ
と思うよ。人にはパーソナルスペースという物があると聞いた事があるが、恐怖や緊張
といった要素があつたとしてもあそこまで自然に手を繋げるのは、お互いがお互いの事
を少なからず好ましいと思つていないと出来ないはず。そうじゃないかな?」

「それは……まあ、そうなのかもしれないね。真央と偶然出会つた時にも一応同じよ
うな形にはなりませんでしたけど、あの時にはあつた困惑とか苦手意識とかが、今はまったく
ありませんでしたし、鈴歌の事を泣き止ませている時に心の奥がなんだかポカポカとし
ていた気がしますから」

「そう言われれば、私もそうだった……かな? あ、それと……暖士の手を握つていた
時、暖士から伝わってくる体温の温かさを感じた瞬間に昔あつた事を思い出しまし
たよ」

「へえ……それで、何を思い出したんだ?」

「えつとね……私がまだ小さかつた頃、どこかで迷子になつちやつただけで、父さん達
が近くにいない心細さとか知らない人達がいつぱいいる怖さからその場で泣き出し

ちやつたんだ。でも、その時に『大丈夫？』って声を掛けてくれた上、一緒に父さん達を捜そうとしてくれた子がいて、あの時の暖士がその子と重なって見えたんだ。顔とか声とかはもうボンヤリとしか思い出せないけど、雰囲気がさっきの暖士と同じだったのだけは覚えてる。スゴく頼りになってとてもカッコいい——なんて、こうして言葉にするのはスゴく恥ずかしいけどね……」

「そ、そっか……」

女子に正面からカッコいいとか頼りになるとか言われた事が無かったため、俺は鈴歌の言葉に軽く気恥ずかしさを覚え、少しだけ顔が熱くなっていた。けれど、こうして頼りにされている事を確認出来たため、それを言葉にはしなかったが心からの嬉しさを感じていた。

鈴歌からはもちろん、アルヴェインさんからも頼りにされているわけだし、二人からの期待にしっかり応えられるようにこれからも二人の安全に気を配りながら精一杯頑張っていかないな。

鈴歌とアルヴェインさん、二人の仲間達の顔を見ながら改めて決意を固めた後、再び本棚の方へと視線を戻した。

「さてと……『傲慢』もいなくなつた事だし、今度こそ本棚や資料室の探索を始めようか」「うんー！」

「ああ」

そして、俺達は手分けをして本棚に収められている本の中をパラパラと捲ったり、万年筆などを見つけた机の引き出しを開けたりしながら資料室の中の探索を始めた。しかし、俺が探している箇所からは、特にめぼしい物は見つからず、手に持っていた本を閉じながらはあと軽く落胆の溜息をついていたその時、「……あれ、これって……？」という鈴歌の声が聞こえ、そちらへ顔を向けながらそのまま声を掛けた。

「鈴歌、何か見つかったのか？」

「うん、机の引き出しを開けてたら暗号みたいなのが書かれた紙とちよつと変な五十音表が出てきたよ」

「暗号みたいなのが書かれた紙にちよつと変な五十音表……うん」

「うん、えーと……紙の方には『下に描かれた色達には、それぞれの名前に沿って数が当てはめられている。しかし、色達は皆が一桁の数だけを好むため、当てはめられた数字をまとめると、一桁の数字へと変えてしまった。さて……諸君らは、それぞれの色が持つ一桁の数字を導き出し、鍵の在処へと辿り着けるかな？』って書いてあって、その下には何色かの四角で出来た数式が書いてあるね。それで、五十音表の方が……五十音表自体は普通なんだけど、下の方に変なスペースがあつて、そこに幾つか掛け算が書いてあるかな」

「何色かの四角で出来た数式と五十音表の掛け算……鈴歌、その紙と五十音表を見せてもらって良いか？」

「うん、ちよつと待っててね」

鈴歌はゆつくりと俺の方へ体を向けると、「はい、どうぞ」と言いながら件の紙と五十音表を渡してくれた。そして、「うん、ありがとう」と言つてそれを受け取り、俺は携帯のライトで照らしながらそれらに目を通した。

「えつと……数式の方が、『赤色の四角＋青色の四角 \parallel 9』と『黄色の四角＋紫色の四角 \parallel 5、それと『赤色の四角＋紫色の四角 \parallel 4』か……。それで、五十音表の掛け算が『 $0 \times 1 \parallel$ わ』と『 $3 \times 5 \parallel$ そ』、それと『 $5 \times 4 \parallel$ ね』だな」

「四角の数式が書いてある紙の方の文章とその掛け算がヒントなんだろうけど、私にはさっぱりなんだよね……」

「まあ、謎解きは俺とアルヴィンさんで担当する事にはしてるから、これに関しては任せてくれ。因みに、これ以外には何かあったか？」

「ううん、何も無かったよ。それに、それがあつたのは最後の引き出しだったからね」

「そつか……うん、分かった。ありがとうな、鈴歌」

「どういたしまして」

そんな会話を交わしていたその時、「おや……何か見つかったのかな？」と尋ねるアル

ヴィンさんの声が聞こえたため、揃ってそちらへ顔を向けた。すると、いつの間にか近付いてきていたアルヴィンさんの手に何かがあるのが見え、俺はそれを指差した。

「アルヴィンさん、それは……？」

「ああ、調べていた本の中に挟まっていた写真だよ。場所までは流石に特定できないが、被写体は小学生くらいの子だね」

「写真……ちよつと見せてもらっても良いですか？」

「ああ、もちろん」

そして、アルヴィンさんから数枚の写真を受け取り、俺と鈴歌はその写真に目を通した。背景が少しぼやけていたため、アルヴィンさんの言う通り、場所を特定する事は出来なかったが、被写体である薄い緑色のワンピースを着た黒いポニーテールの女の子の姿は、しっかりと写っており、その満面の笑みは見ているこつちまでなんだか楽しくなってくる程、とても良い笑顔だった。

「この子、なんだかスゴく楽しそうな感じだけど、背景がぼやけてるからなんで楽しそうなのかまでは分からないな」

「うん、そうだ——あれ？ この女の子、どこかで見たような気がする……」

「うーん、鈴歌の友達の小中学生時代とか鈴歌の家の近所の子とかじゃないのか？」

「ううん、たぶん違う。それに……この緑色のワンピースも見覚えがあるような……」

鈴歌は写真を見ながらこの女の子について必死に記憶の中を探っていたが、程なく嬉しそうな様子で両手を軽くポンと打ち合わせると、写真の中の女の子を指差しながらとても嬉しそうに話し掛けてきた。

「これ……小学校の頃の私だよ！ わあ……なんだか懐かしいなあ……！」

「へー……鈴歌の小学生時代は、こんな感じだったんだな」

「ふふ……昔からとても可愛らしいお嬢さんだったようだね」

「可愛らしいって……もう、そんな事無いですよ。でも、どうして私の小学生の時の写真がこんなところに……？」

鈴歌は写真を指差しながら不思議そうに小首を傾げていたが、俺にはその答えが何となく分かったような気がした。

「たぶんそれは……この写真の場所が、『ドリームアイランド』だから、そして写真を撮ったのがドリーマーだからだと思う」

「え、どういう事……？」

「今のところ、俺達には10年前に『ドリームアイランド』に行った事があるという共通点がある。そして、まだ予測に過ぎないけど、ドリーマーは『ドリームアイランド』の関係者だと俺達は考えている。つまり、この写真は鈴歌が『ドリームアイランド』に行った時の写真で、『ドリームアイランド』の関係者であるドリーマーが撮った写真だから、

この『エンドレスドリーム』内に写真があった。そう考えるのが自然だと思う」

「でもそうなるよ……私は10年前にドリーマーに会った事があるって事になるけど、皆と一緒にドリーマーの姿を見た時、まったく見覚えが無かったよ……？」

「それはたぶん、会ったのが10年前の一度きりだったから記憶が薄れている上、ドリーマー自身が仮面やシルクハットで顔などを隠していたからだと思う。何の狙いがあった鈴歌をここに連れてきたかは分からないけど、ドリーマーとしては最後の最後まで鈴歌に自分の正体を悟られたくはなかった。だから、仮面を付けたりシルクハットを被ったりする事で、鈴歌が思い出すきっかけになりそうな自分の特徴を隠したんだよ。まあ、何でバレたくないかまでは、さっぱり分からないけどな」

「そうだね……でも、本当にドリーマーの正体が、私が10年前に会った事がある人なのかは確かめたい。もちろん、生きて帰るのが一番の目的だけど、このままモヤツとした状態にしておくのは、流石に嫌だからね」

「そうだな」

鈴歌の言葉に頷きながら答えた後、俺はさつき鈴歌が見つけた暗号と五十音表をアルヴィンさんに見せた。

「アルヴィンさん、鈴歌が机の引き出しから見つけてくれた物なんですけど、どうやら何かの暗号になっているみたいなんです」

「暗号か……ふむ、なるほどなるほど……」

アルヴィンさんは暗号の紙と五十音表を交互に見比べながら考え込むような素振りを見せた後、「……ああ、そういう事か」と納得した様子でクスリと笑っていると、鈴歌はとても驚いた様子を見せた。

「え、もう分かったんですか?」

「ああ、ヒントなら充分にあったからね。暖士君、君はどうかかな?」

「そうですね……」

そう言いながらももう一度暗号と五十音表に視線を落とし、文章や掛け算などをじっくりと眺め、五十音表に視線を移したその時、俺はある事に気が付いた。

「ん……ああ、そういう事か。という事は、これがこうなるから……」

そして、ヒントなどを元に色々考え、答えらしい物に辿り着いた瞬間、頭の中でカチリとパズルが嵌まるような音が聞こえた気がした。

「……よし、解けた気がする」

「え……暖士も!?!」

「ああ、一応な。アルヴィンさん、もしかしてですけど、職員室のキーボックスのダイヤル錠って……」

「ああ、君が考えている通り、四色に色付けされていたよ」

「となると、次に向かうべきは……」

「職員室、という事になるね」

俺とアルヴェインさんで笑い合いながら話をしていると、まだ一人だけ答えが分からない鈴歌が困惑した表情を浮かべながら俺達に話し掛けてきた。

「ねえ、この暗号の答えって結局なんなの？」

「……それは、職員室に行ったらちやんと話すよ」

「だから、まずは一緒に職員室に行こう。『傲慢』が来ない内に、キーボックスから様々な部屋の鍵を取っておきたいからね」

「……分かりました」

鈴歌が諦めたように頷きながら答えた後、俺達は職員室のキーボックスを開けるために資料室を後にした。

第7話 答え合わせと明らかになる事実

職員室に戻ってきた後、俺達は暗号の答え合わせをするためにキーボックスの前に立った。

「さてと……それじゃあ俺達の答えが合っているか試してみるか」

「うん。それで、この暗号はどう解けば良いの？」

「ああ、それにはまず、この五十音表を使う必要があるんだ」

「五十音表……下の方に掛け算が書いてある以外は、特に変なところは無さそうだけど……？」

五十音表を見ながら鈴歌が小首を傾げる中、俺はさつき手に入れたメモ帳とペンを取り出し、五十音表と暗号の紙をアルヴィンさんに開いてもらいながら書かれた掛け算の内の一つをペンで差した。

「鈴歌も知ってるように、五十音には『あ行』や『か行』のような『行』と『あ段』や『い段』のような『段』がある。そして、この掛け算の数字は、最初の数字が『段』を後の数字が『行』の数を表しているんだ。例えば、この『10×11わ』だけど、五十音表によると『わ』はあ段の10個目のところにあつて、わ行の1個目のところにあるから、

この数式に当てはめると『 $10 \times 1 \parallel$ わ』になるわけだ」

「あ、なるほど……！　って事は、『 $3 \times 5 \parallel$ そ』も『そ』があ段の3つ目でさ行の5つ目だからなんだね」

「そういう事だけど、本題はここからだ。暗号の方には『下に描かれた色達には、それぞれの名前に沿って数が当てはめられている。しかし、色達は皆が一桁の数だけを好むため、当てはめられた数字をまとめ、一桁へと変えてしまった』と書いてあった。だから今度は、四色の四角——赤と青と黄と紫の四色をさっきの数式に当てはめていく」

「数式に当てはめるとして事は、赤なら『あ』と『か』に分ける事になるけど、そこからどうやって数字を導き出していくの？」

「それなんだけど、ここでさっき解いておいた『 $10 \times 1 \parallel$ わ』と『 $3 \times 5 \parallel$ そ』が役立つんだよ。この掛け算は、どの文字がどの数字になるかを表していて、式を普通に解くと『 10×1 』は10、『 3×5 』は15となる。つまり、わ \parallel 10、そ \parallel 15だな」

「うう……自分から聞いておいてなんだけど、数学の授業を受けている気分になつてきた……」

「まあ、もう少しで終わるからそれまで我慢してくれ。そして、今度はさっき鈴歌が言っていたように四色の名前に当てはめられた数字——例えば赤なら『あ』と『か』を数字に変換していくんだけど、『あ』はあ段から1個目、あ行から1個目のところにあるから、

『1×1』あ11』になり、『か』はあ段から2個目のか行から1個目のところにあるから、『2×1』か12』になる。つまり、『あか』は『12』という事になるな」

「あれ……でも、文章には『色達は一桁の数だけを好む』って書いてたよね？ 12は二桁の数だから、答えにならないんじゃないや……」

「まあな。だから、この12を今から一桁の数に変えるんだよ。当てはめられた数字をまとめる事でな」

そこで一度言葉を切った後、メモ帳の次のページを捲り、再び説明を始めた。

「まず、この『まとめる』の意味なんだけど、これはその色に当てはめられた数を足す事なんだ。それで、何の数を足すかだけ……それがさつき導き出した『あ』と『か』の数だ。つまり赤色の四角に当てはまる数字を導き出すには『1+2』をしろって事になるな」

「『1+2』は『3』……って事は、赤色の四角に当てはまるのは3になるんだね」

「ああ。そして、同じように他の三色も数字に直していくと、青が『15』の黄が『4』、紫が『21934』になる。それで、今度はそれぞれを一桁に直していくと、青が『6』の黄がそのまま『4』の紫が『1』という事になるから、後はこの四つの数字を使ってキーボックスのダイヤル錠を開ければいいわけだ」

「なるほどね……あれ、でも……それじゃああの紙に赤色の四角+青色の四角19って

書いてたのは……」

「恐らく、救済措置か検算をするための物だろうね。もし、私達や他の参加者がこの暗号を解けていなくとも、既にこのダイヤル錠の事を知っていれば、どこで使う物なのかは察しがつく。だから、後はこの四色の四角に色々な数字を当てはめていき、数式にピッタリ合う数を見つけ出せば、ダイヤル錠を開ける事が出来るという事になるかな」

「つて事は……ドリーマーはわざわざ二種類の解き方を用意していた事になりますよね？ 暖士とアルヴィンさんみたいに謎解きが得意な人用と私みたいに謎解きが苦手な人用で……」

「ああ。何故、ドリーマーがそんな事をしたのかは分からないけど、ドリーマーには何か意図があるのかもしれないね。さて……それでは、そろそろダイヤル錠を開けて中の鍵を取るでしょうか」

「そうですね」

頷きながら答えた後、俺はダイヤル錠に顔を近付けた。ダイヤル錠は、それぞれの数字が暗号の紙と同じように四色の枠で囲まれており、俺は間違えないように気をつけながらダイヤルを次々と合わせていった。そして、最後のダイヤルを合わせた瞬間、カチリという音を立ててダイヤル錠が開いた。

「……よし、どうやら合ってたみたいだな」

「鍵は……うん、『図書室の鍵』『家庭科室の鍵』、それに『校長室の鍵』や『屋上の鍵』なんかもあるようだ。これくらいあれば、校内の殆どの場所を開けられると思うよ。ただ……出口の鍵は無いようだけどね」

「まあ、こんな簡単に手に入ったら苦労しないですからね。でも、これで探索の幅は広がったわけですし、このまま協力し合えば脱出だって夢じや——」

その時、職員室の黒電話が急に大きな音で鳴り出し、その音を聞きながら俺達は一斉に顔を見合わせた。そして、二人に対してコクンと頷いてから職員室のドアを警戒するように手振りで報せた後、俺は黒電話へと近づき受話器を静かに取った。

「……もしもし?」

『ククク……探索は順調そうだね、甲斐暖士君。君達ならあの暗号は解けると思っていたが、まさかここまで簡単に解いてしまうとはね……』

「ドリーマー……今度は何の用なんだ?」

『そうだね……強いて言えば、君達にある事を伝えようと思ったから、かな?』

「ある事……?」

『その通りだ。尚、前回の電話の際にもう分かったとは思いますが、この私からの電話の内容はこの職員室の中にいる全員に伝わるようになっていた。仕組みについては……まあ、私の力による物だと思ってくれば良いよ。そして、この電話の最中に『傲慢』が襲っ

てくる事は一切無いから、職員室のドアを警戒する必要も無いという事は伝えておく
う』

「……それも、お前の力に因るものなのか？」

『そんなところだ。さて……それでは、そろそろ本題に入ろう。まず、先程君達が資料室で見つけたメモと小学生の頃の神月鈴歌しんづきれいかさんの写真の件だが、君達の予想は全て当たっているよ。あのメモは、私がかつて書いた物をそのままこの世界にコピーした物で、写真の方も撮られた場所は『ドリームアイランド』で間違いない』

「そうか……つまり、鈴歌は10年前にお前に会った事があるわけだな？」

『ああ、その通りだ。そして、あのメモで私が『ドリームアイランド』の関係者という記述があつたと思うが、今思えばあれは半分間違っている。確かに私と『ドリームアイランド』にはある関係が存在するが、ちゃんとした関係者になる前にあの夢の場所は閉園してしまった。だから、関係はあつても正確には関係者ではない、という事をここに訂正しておこう』

「……そうか」

『まあ、たとえそうだとしても私は今でもあの夢の場所を取り戻したいと思つているよ。あの場所は、私にとって掛け替えのない場所だからね。さて……それでは、そろそろ電話を切るとしようか。これ以上、君達の探索の邪魔をしてしまうのは申し訳ないから

ね』

「……なら、最後に一つだけ訊かせてくれ」

『何かな?』

「……あのメモに書いてあった『出会い』という言葉、その出会いというのは鈴歌の事か? それとも……」

『君とアルヴィン・タイ君を含めた物か……かな?』

「ああ。俺達は10年前に『ドリームアイランド』に行った記憶があるが、同じ日だったかは流石に分からない。けれど、もしあのメモに書いてあった出会いがどういう物か分かれば、俺達と同じ日に行ったかが分かるはずだからな。もつとも、覚えていないだけで10年前以外にも行った事があるみたいな不確定な要素はあるけどな」

『……クク、なるほど。それについて答えてあげたいのはやまやまだが、今の時点でそれを答えてしまつては流石にサービスのしすぎになる。なので、君達がこの『深淵高校』をクリアした時には、その事について答えるとしよう。……まあ、私が答えずとも答えに気付いている諸君もいるかもしれないがね』

「……分かった。だが、その約束は絶対に守ってもらうからな」

「ああ、もちろんだとも。……では、君達の健闘を祈っているよ」

その言葉を最後に、ドリーマーからの電話は切れ、俺はさっきの会話を思い返しなが

ら受話器を静かに置いた。10年前に鈴歌とドリーマーが出会った際に撮られた写真や話している時の声の感じからドリーマーは鈴歌に対して悪印象を持つている様子は無い。つまり、鈴歌との出会いはメモに書いてあった『出会い』と同じ物なのだろう。となると、ここで疑問になってくるのは、メモに書いてあった奴らという存在とその奴らに対して何かしらの形で自身の罪を思い知ってもらおうという点だ。さっきの事から考えると、鈴歌は明らかにその奴らには当てはまらない事になり、奴らと呼ばれるのは俺とアルヴィンさんを含めた他の5人の中にいる事になる。ただ、そう呼ばれる理由は俺には全くない上、ドリーマーは『三人の共通点』があると云っていた事から、俺達が奴らと呼ばれる存在ではない事が共通点だとも考えられる。

……正直、まだまだ謎は多いけど、鈴歌達とこのゲームをクリアするために頑張る中で、その謎の答えも少しずつ分かってくるはずだ。だから、絶対にこのゲームをクリアしないとイケない。この『エンドレスドリーム』から脱出して現実世界に生きて帰るため、そして全ての真相を知るためにも。

シンと静まり返った職員室の中で俺はそう思いながら黒電話の受話器から手を離れた後、クルリと振り返った。アルヴィンさんがとても落ち着いた様子でコクンと頷く中、鈴歌は軽く俯きながら不安そうな表情でポツリと呟いた。

「……私が10年前にドリーマーと会っていたのは事実だった。でも、だとしたらド

リーマーは一体誰なの……？」

「それはまだ分からない。けど、さっきの声の感じや話し方から考えると、ドリーマーは少なくとも鈴歌に対して敵意を感じていたり悪印象を持っていたりするわけじゃないと思う」

「暖士……」

「ドリーマーの目的や俺達をここに連れてきた理由だつて正直な事を言えば、まだ全然分からない。あの感じからすると、ドリーマーはまだ何かを隠しているはずだし、もしかしたら本当に俺とアルヴィンさんとも何かしらの繋がりがあってあるかもしれない。だからこそ、それを知るために今は一歩ずつでも歩いていくしかないんだ。まったく何も分からない暗闇の中を一歩ずつでもな」

「何も分からない暗闇の中を一歩ずつ……」

「ああ。でも、俺達が協力し合えば、そんな暗闇でも少しずつなら照らしていける。実際、鈴歌が資料室で暗号を見つけてくれて、アルヴィンさんと俺がそれを解いたからこうして色々な鍵を手に入れる事が出来、これまでよりも探索の幅は絶対に広がってる。これは俺達が協力し合った事で生まれた確かな事実だ。だから——」

未だ不安そうに俺の事を見つめる鈴歌に対して右手を差し出した後、ニコリと笑いなから言葉が続けた。

「今はただ前を向いて歩いていこうぜ、鈴歌。生きてここから出るといふ俺達の一番の目的のため、そして全ての真相を知るためにさ」

「暖士……うん、そうだよね。ここでクヨクヨしてても何も始まらないし、何も起こらない。だったら、今はただひたすらに前を向いて歩いていった方が良いんだよね」

「ああ、そうだ。そして、資料室でも言ったけど、お前やアルヴィンさんの事はこのチームのリーダーとして絶対に守ってみせる。だから、これからは俺についてきてくれ、鈴歌」

「……ふふ、もちろんだよ、暖士」

安心した様子で笑みを浮かべた後、鈴歌は差し出された俺の手をスツと取って優しく握った。そして、それに対して俺も握り返すと、鈴歌は出会った時と同じような表情で言葉を続けた。

「でも、私達が暖士のことを信じる以上、その言葉は絶対に引つ込ませないし、その約束は絶対に果たしてもらうからね」

「ああ、それはもちろんだ。俺自身、その約束は絶対に守るつもりでいるからな」

「……うん、それなら良いよ。でも、もう一つだけ約束して欲しい事があるかな」

「ん……何だ？」

「私達の事を気に掛けてくれるのは嬉しいけど、自分の命もちゃんと大切に。暖士

が私達の事を大切に思ってくれてるのと同じように、私達だって暖士の事は大切に思っているから。それに、私達の約束は『絶対に生きて帰る事』だから、たとえ私達が無事に生きて帰る事が出来ても、そこに暖士がいなかったら意味が無い。私達だけじゃなく、暖士も揃ってこそその約束は意味を成すの。だから、私達の事を気に掛けてくれるのと同じくらい、自分の命も大切にしてい」

「鈴歌……」

鈴歌は強気に振る舞っていたが、俺を見つめるその目には明らかな不安の色が見えており、その事から鈴歌が心からそう思っている事がしつかりと感じ取れた。俺はその事に嬉しさを感じた後、鈴歌の目を真っ直ぐ見ながら答えた。

「ああ、もちろんそのつもりだ。さつきも言ったけど、皆で一緒に生きて帰る事こそが、俺達の一番の目的だからな」

「……うん！」

とても嬉しそうに頷く鈴歌に対して頷き返した後、今度はアルヴィンさんの方へ顔を向けた。

「アルヴィンさん」

「……ああ、分かっているさ。私も出来る限り君達の事を守るつもりだが、自分の命だって大事にする。君達と一緒にここから生きて帰るためにもね」

「はい。だから、これからもよろしくお願いします、アルヴェインさん」
「こちらこそ、暖士君」

右手で鈴歌と、そして左手でアルヴェインさんと握手を交わした後、脱出へ向かってまた一歩ずつ歩むために職員室のドアの方へ体を向けた。

「よし……それじゃ早速探索を再開しよう！」

「うん！」

「ああ」

そして、職員室のドアに手を掛けたその時、廊下の方から突然「う……うわあーっ!!」
という悲鳴が聞こえ、俺達は顔を見合わせた。

「今の声って……!!」

「ああ、恐らくそうだろうが、まずは行かないといけないね……!!」

「ですね……!!」

「よし……行こう、二人とも！」

鈴歌達に声を掛けた後、俺は職員室のドアを勢い良く引き開けた。